

# 2021 年度 日本語教育実習報告書

東京女子大学

日本語教員養成課程



はじめに

コロナウイルスの猛威が収まらず、昨年度に続き、大学もウィズ・コロナの授業となりました。

政府の方針により、外国人の入国が厳しく制限され、入国が許可されるかの見通しも立たず、日本留学を諦めた方も少なくないようです。日本留学をこころざし、準備してくださっていた方々の熱いお気持ちを受け止められないことは、たいへん残念なことです。また、受け入れ準備をなさってきた日本語教育機関の皆さまには、ご対応に苦慮されたことと拝察いたします。

そのような状況にもかかわらず、例年と同様に本学の学生を実習生としてご指導くださいましたインターカルト日本語学校、カイ日本語スクール、新宿日本語学校、ラボ日本語教育研修所の先生方のご理解とご協力により、本学の学生が貴重な経験をさせていただきました。日本語学校もコロナ禍の影響を大きく受けている中、通常の対面授業のほか、年々進化しているリモートでの授業など、先生方の工夫溢れる授業を拝見させていただいたり、ご自身の経験や日本語教育に対する思いや考え方をお話しくくださるなど、多くのご指導をいただきました。心より感謝申し上げます。

日本語学校での実習のほか、通常は学生たちが大学内に日本語クラスを開設し、学習者を募集して、実習を行います。今夏もコロナ禍のためにキャンパスへの立ち入りが出来なくなり、学内での実習が行えなくなりました。そこで、初めての試みとして、インターネット上で、日本語を学びたい人たちを募り、共に学ぶ、5日間のオンライン日本語クラスを開きました。

母語や年齢、日本語レベル、言語学習経験、居住地域、使用言語など、参加者は極めて多様ですが、日本の社会文化に対する関心や、日本のアニメーションという共通の関心事を通して、日本文化に惹かれている点が共通でした。ネット上でお互いの関心事を共有したり、意見や情報、多様なリソースを交換しながら、小さなコミュニティができていきました。関心のある事を共有できる楽しさが、どれほど言葉を伸ばす力となるかを改めて確認しました。手探りで始めた試みですが、私自身、多くの気づきを得た実習でした。

実習報告会も、リモートで実施したため、実習受け入れ校の先生方を始め、本学の実習に関心を持ってくださった方々が多数ご参加くださいました。それぞれのご都合や関心に合わせてご参加いただけ、リモート利用の大きなプラス面を実感しました。

コロナ禍の終息は、まだ見通せません。海外との人流が滞り、十分な交流や活動が出来ない状況がいつ終息するかもわからず、苦しくなることもあります。これまで考えて見なかったこと、気づかなかったこと、やってみなかつたことに気づききっかけは、そこ、ここにあるのかも知れません。新たな実習を通して、これまで見過ごしてきたこと、やってみなかつたことに目を向けてみようと思います。コロナ禍での実習を通して、多くの気づきを得ました。学内・学外、そしてインターネット上での実習報告を読み、皆さまの気づきを私も共

有させていただきました。

たいへんな状況が続いておりますが、1日も早く、安寧な日々が戻りますことを願います。

2022年2月吉日

日本語教員養成課程運営委員長

日本語教育実習担当

石井恵理子

# ◇2021 年度 日本語教育実習報告書◇

## ～目次～

はじめに

日本語教育実習の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

「日本語教育実習」全体の流れ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

実習報告：学内実習（フィールド実践 A）

うさぎムーン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

ひまわり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

実習報告：学外実習（フィールド実践 B・C）

2021 年度 学外実習受入日本語教育機関・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39

インターカルト日本語学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41

カイ日本語スクール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53

新宿日本語学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65

ラボ日本語教育研修所・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79

実習を振り返って - 個人レポート概要

学内実習（フィールド実践 A）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95

学外実習（フィールド実践 B・C）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98



## 日本語教育実習の概要

### 1. 日本語教育実習の目的

日本語教育の実際は、多様である。日本国内においても、日本語学校や大学等教育機関として長期的に日本語教育を行う場合と、中国帰国者や技術研修生等に対して短期間集中的に初期指導を行う場合、また地域の日本語教室のように地域を基盤として行われる場合とでは、日本語教育の目的や教育内容・方法等に大きな違いがある。また、たとえば日本語学校であっても、学習者の背景や、教育機関の設置形態、教育設備等の環境などさまざまな違いがある。国内と海外では、社会の言語環境など学習者や日本語教育の場を取り巻く環境も大きく異なる。そうした多様な現場において、教える立場に立つ者に求められることも当然同じではない。

この日本語教育実習では、大学を卒業した後、どのような日本語教育の場に関わるとしても、そこでの日本語教育が何のためにあるのかを考え、学習者や学習の場を取り巻く環境をよく見、そのうえで自分がどのような役割を担い何をすべきかを判断できる力をつけることを目標とする。

### 2. 日本語教育実習の構成

「日本語教育実習」は、以下の3つの部分で構成される。(図「日本語教育実習全体の流れ」参照)

#### ① 事前準備

講義等による指導を受けると同時に、学習者のニーズや日本語教育の目的、学習環境などに関して事前に情報収集を行い、自分が関わる日本語教育の位置づけを理解し、自分の役割の明確化・実習の目標設定を行う。

#### ② フィールド実践

実際に、日本語教育の現場で学習支援の活動を行う。その際、目標設定に合わせて、振り返りのためのデータを収集する。

#### ③ 振り返り

自分自身の目標に照らして、フィールド実践がどうであったかを収集したデータの分析をふまえて振り返る。

学習者と直接向き合って学習支援を行う「フィールド実践」を中心に、事前に自分が関わる学習の場についての情報を得る「事前準備」を十分に行い、実践での各自の目標を設定すること、また実際に自分が行った学習支援活動について、自分自身の意識、学習者の反応、指導担当の先生をはじめとする受け入れ期間の人々からのフィードバックなどを踏まえて「振り返り」を行う、これら3つの部分全体をもって「日本語教育実習」とする。

※「フィールド実践」は通常は以下のA~Cの3つの形態で実施するが、今年度はコロナ禍の影響でA. スクール・シミュレーション型(学内での実践)は中止し、オンラインクラス2クラスを開講した。

#### A. スクール・シミュレーション型(学内での実践)

学内に学習者を集めて5日間の日本語コースを開設する。コース設計から、学習者の募集・

選考、教案作成、授業実施まで、全てを学生が自主的に運営して行う。

#### **B. 短期集中型（学外での実践）**

学外の日本語教育機関において2週間程度、集中して実践を行う。授業での役割や支援の内容は、担当教師のコース計画に従う。

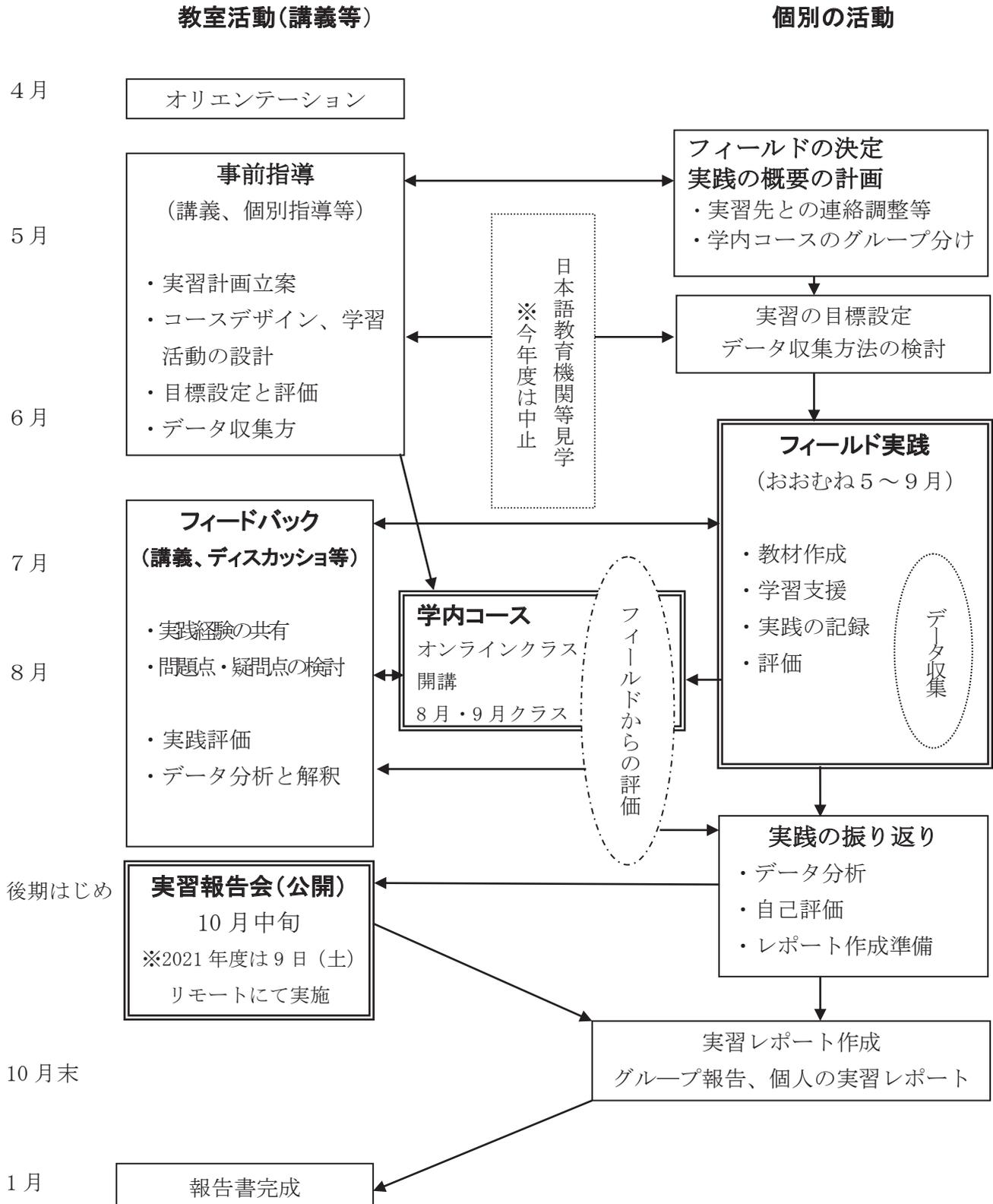
#### **C. 長期継続型（学外での実践）**

学外の日本語教育機関で、一つのクラスに一定期間（2～3ヶ月程度）継続的に参加する。いわばティーチングアシスタントとして、クラスを担当する教師と共に、授業に参加し、学習支援を行う。授業での役割や支援の内容は、担当教師のコース計画に従う。

フィールド実践と並行して行われる毎週の授業、あるいは実践終了後の実習報告会では、それぞれの機関での実践の経験をお互いに共有することで、自分が関わる教育現場（フィールド）の特性をより明確に理解し、そこでの活動の一つ一つが、何のために、なぜそのようなやり方で行われたのかを考える契機となることを促進する。それぞれの異なる経験を共有することによって、自分自身の経験をより広く深いものにすることは、教師に求められる重要な行動でもあるからである。

これらの過程を経て、実習についての報告をグループごと（学内実習はコースごと、学外実習は実習を行った機関ごと）に作成し、各個人の振り返りをレポートにまとめた。

## 【実習全体の流れ】



## 2021年度「日本語教育実習」進捗表

担当： 石井恵理子  
吉本恵子

講義 全14回

回	月日	理 論	実 践
1	4月9日	オリエンテーション コース概要説明	
2	4月16日	コースデザイン 1	学習者の背景を考える
3	4月23日	コースデザイン 2	学習者のレベルと初級授業
4	4月30日	日本語授業の流れ 日本語教育現場の声を聞く(ゲスト)中村香奈さん(2016年度卒業生)	授業の準備
5	5月7日	教材・学習リソース1	教材・教具
6	5月14日	教材・学習リソース2	教材・教具
7	5月21日	学習活動の設計1	初級から中・上級へ
8	5月28日	学習活動の設計2	初級から中・上級へ
9	6月4日	授業の観察・診断	様々な活動
10	6月11日	学外実習先の紹介 実習班に分かれてチームミーティング	
11	6月18日	教材・学習リソース3 実習班に分かれてチームミーティング	
12	6月25日	授業分析・評価	
13	7月2日	実習班に分かれてチームミーティング	オンライン実習準備(コース設計) (5日間の大枠検討)
14	7月9日	学外実習のフィードバック	オンライン実習準備(授業案作成)  * 13時ポスター案〆切 * 7/13(火)13時 修正ポスター締切、印刷 7/14(水)発送

- ・オンライン実習期間…8月コース:8/11(水)12(木)17(火)18(水)19(木)  
…9月コース:9/6(月)7(火)8(水)9(木)11(土)
- ・実習報告会(公開)…10月9(土)9:00~12:00 オンライン開催

◆実習報告◆

学内実習  
(フィールド実践 A)



# 『鬼滅の刃』の聖地に行こう！旅行計画を立てよう！

～『鬼滅の刃』日本語学習編 with 東京女子大学生～



「鬼滅の刃」に出てきたあの場所は、  
日本のどこにあるの？  
そこにはどんなものがあるの？  
みんなで調べてみよう！



好きな場所を組み合わせ、  
3日間の旅行計画を考えてみよう！

期間：8月11, 12, 17, 18, 19日  
(日本時間18:30～20:00)

※原則として5日間すべて参加できる方

募集人数：10～15人

レベル：中・上級

開催方法：オンライン (zoomを使います)

必要なもの：パソコンまたはスマートフォン

# 日本語クラス参加者募集

～オンラインで日本語を学ぼう！～

東京女子大学 ひまわりチーム

## 【説明会について】

コースが始まる前に、コースの説明会に来てください。

- 日時：7月18日 18:30～19:30 (日本時間)
- 21日 20:00～21:00
- 25日 18:30～19:30

※早く募集人数が決まったら、後の説明会は中止します。

- 場所：オンライン (zoomを使います)

## ●受付期間

7月15日～8月6日

※定員になり次第、受付を終了します

## ●申し込み方法

- ①GoogleフォームのQRコードを読み取り、送る →
- ②メールを送る (tonjo.nihongo.himawari@gmail.com)



- ・お名前
- ・出身国
- ・電話番号
- ・電話してもいい時間
- ・E-mailアドレス
- ・使う機器 (パソコンまたはスマートフォン)
- ・説明会の希望日

## 【メール例】

natsu.nihongo.class@gmail.com

7月〇日説明会の申し込み

- ①名前
- ②出身国
- ③電話番号
- ④電話してもいい時間
- ⑤E-mailアドレス
- ⑥参加する機器
- ⑦説明会の希望日



©タイトル:フラックジャックによるしく 著作権名:佐藤秀雄

「ニヤツ」<sup>わら</sup>と笑う

ちが

違いがわかりますか?



©タイトル:フラックジャックによるしく 著作権名:佐藤秀雄

「ニコッ」<sup>わら</sup>と笑う

おと

# 音やようすを表す日本語を学ぼう!

まな

にほんご

日付: 9月 6日, 7日, 8日, 9日, 11日(5日間)  
 時間: 夜 8時 から 9時 30分まで (日本時間)  
 開催方法: オンライン (「zoom」を使います!)

## -プログラム内容-

アニメやマンガを使って、音やようすを表す言葉<sup>ことば</sup>を学びます。



パン?<sup>ひと</sup>



子どもが泣く?



犬が鳴く?

## -応募できる人-

- ・中級以上
- ・説明会に1回参加できる人 また、クラスに5日間参加できる人
- ・説明会の日程: 7/21(水), 7/29(木), 8/7(土), 8/8(日), 8/13(金) 夜8時から9時30分
- ・募集人数: 10~15人

## -説明会の申し込み方法-

右のQRコードを読みとり、フォームに入力してください。⇒  
 フォームが送れないなど、困ったことがあったら、  
 この連絡先にメールしてください!

連絡先: usagi.moon.team@gmail.com

申し込みの締め切り: 8月 11日 (水)

※定員を超えたら、参加者を抽選(くじ)で決めます。



URL: <https://bit.ly/36w2hey>

◆ うさぎムーン ◆

「音やようすを表す日本語を学ぼう！」

雨宮雅

内川鼓

大久保広美

木俣莉子

柳澤由加子

# うさぎムーンチーム

内川鼓  
雨宮雅  
大久保広美  
木俣莉子  
柳澤由加子

## 1. テーマ

「音や様子を表す日本語を学ぼう！」

テーマ設定の理由：日本語は他の言語と比べて、オノマトペがとても多く特徴的で、学習者の関心も高いと考えたから。日本語学校では中上級以上でオノマトペを扱うが、あまり多くは扱わないことを知り、取り扱う意義があると考えたから。

## 2. 対象レベル

募集時の想定：中級以上

実際集まった方々のレベル：初中級～上級  
(レベルに大きなバラつきが生まれた)

## 3. 目標

日本語におけるオノマトペの効用を理解し、楽しみながら活用する

⇒オノマトペの効用の中でも、「興味関心を引いて、消費者の印象に残る」ことに注目し、オノマトペを使用したCM作成ワークに取り組む

## 4. 学習者の概要

国籍	性別	レベル	所属	出欠
中国	男性	上級	イーストウエスト日本語学校	全日
中国	男性	中級	イーストウエスト日本語学校	全日
中国	女性	上級	イーストウエスト日本語学校	全日
中国	女性	上級	御茶ノ水女子大学	全日
台湾	男性	上級	なし	全日
台湾	女性	中級	なし	全日
台湾	女性	上級	東呉大学	全日
台湾	女性	上級	東呉大学	全日
台湾	女性	上級	東呉大学	1, 3日目欠席
韓国	女性	上級	イーストウエスト日本語学校	全日
イタリア	男性	中級	なし	全日

イタリア	女性	上級	なし	全日
イタリア	女性	中級	なし	全日
インド	女性	中級	Bluebells School International	全日
ブラジル	女性	上級	なし	全日
ブラジル	女性	上級	なし	全日
メキシコ	男性	上級	なし	全日
メキシコ	男性	中級	なし	3, 4, 5日目欠席
ロシア	女性	中級	イーストウエスト日本語学校	2日目欠席

#### 5. 実施までのスケジュール

6月	<ul style="list-style-type: none"> <li>①メーリングリスト作成</li> <li>②チーム分け <ul style="list-style-type: none"> <li>・チーム名決定</li> <li>・役割決定</li> </ul> </li> <li>③コース概要の決定 <ul style="list-style-type: none"> <li>・開催日、時間、募集人数の決定</li> <li>・クラスの到達目標決定</li> </ul> </li> </ul>
7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>④ポスター完成・提出</li> <li>⑤参加者募集 <ul style="list-style-type: none"> <li>・各自SNS等での宣伝</li> <li>・説明会開催(21, 29日)</li> </ul> </li> <li>⑥草案作成</li> </ul>
8月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・説明会開催(7, 8, 13日)</li> <li>・草案作成</li> <li>⑦教案作成・検討</li> </ul>
9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>⑧教案完成 <ul style="list-style-type: none"> <li>・実習最終日の聴講者募集</li> </ul> </li> <li>⑨実習(6~9, 11日) <ul style="list-style-type: none"> <li>・質問対応</li> <li>・事後アンケート</li> </ul> </li> </ul>
10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習報告会(9日(土)・09:00~12:00、zoom)</li> <li>・チーム報告書、個人レポート提出(29日締め切り)</li> </ul>

## 6. 5日間の概要

9月6日 (月)	<p><u>目標・発話や議論がしやすい雰囲気をつくる</u></p> <p>・学習者自身の中で、オノマトペについてのイメージを連想させる</p> <p>◆アイスブレイク ①ポーズを揃えよう！ ②自己紹介クイズ</p> <p>◆オノマトペ導入ワーク:オノマトペの規則・性質</p> <p>◆どんな商品だろう?:ガリガリ君、ゴキブリはいはい</p>
9月7日 (火)	<p><u>目標・広告やパッケージを利用し、オノマトペを宣伝に入れる効果を理解する</u></p> <p>◆おしゃべりタイム</p> <p>◆みんなでポテトチップスを食べよう！</p> <p>◆パッケージを見てみよう</p> <p>◆アイスクリーム宣伝</p> <p>◆CM班 テーマ探し</p>
9月8日 (水)	<p><u>目標・CMにオノマトペを入れられるようになる</u></p> <p>◆おしゃべりタイム</p> <p>◆CMにオノマトペを入れてみよう:オロナイン軟膏</p> <p>◆CM班 CM作成</p>
9月9日 (木)	<p><u>目標・CMを完成させて最終発表へ向けて準備する</u></p> <p>◆おしゃべりタイム</p> <p>◆アイスブレイク:ワードウルフ</p> <p>◆最終発表に向けての説明</p> <p>◆CM班 CM作成</p>
9月11日 (土)	<p><u>目標・CM発表を行い、5日間の活動を達成感と共に締め括る</u></p> <p>◆最終準備</p> <p>◆UMCMコンテスト</p> <p>◆5日間の振り返り</p>

## 7. 1日ごとの振り返り

### 1) 1日目

#### アイスブレイク・自己紹介

##### 【よかった点】

- ・ワークの説明の際に例として実習生が実演したことで、学習者がワークの内容を理解しやすくなり、やることがわからないという学習者がいなかった。
- ・グループワークを取り入れたことで、1回も話さない学習者を出すことはなかった。

##### 【反省点・改善策】

- ・時間配分の設定の見通しが甘く、後に予定していたワークの時間を削ったり、グループワークから変更しなければならなくなってしまった。  
⇒2日目以降はタイムテーブルを作成し、ワークの時間設定も見直した。
- ・学習者の反応をしっかりと確認し、それを共有することができなかった。  
⇒司会以外の役割分担をしていなかったため、細かい役割分担を設定し、学習者の反応を確認する役割を設けた。
- ・ワークの内容を説明するスライドにふりがなを振っていなかった。  
⇒2日目以降のスライドには全てふりがなを振るように心がけ、実習生同士で確認した。

#### オノマトペの導入

##### 【よかった点】

- ・オノマトペの規則性を伝えたことで、CM作成時にわからないオノマトペがあった際にも規則性をもとに推測することができていた。

##### 【反省点・改善策】

- ・説明に用いたスライドや原稿を、中上級向けに作ってしまったため難解になってしまった  
⇒・2日目以降のスライド、資料は言い回しを易しいものに変更し、ルビを振った
  - ・理解しきれなかった方のために取り扱った内容をハンドアウトにまとめ、配布した。(末尾に付録)
- ・多くの参加者が着いてこられないスピードで進行してしまい、取り残してしまった。

この導入は全参加者が集まるメインルームで行った。導入内では、全参加者に対して考えてほしいことを、問いかけ、考えてもらう形で進行していくことを考えていたが、こちらが上手に指示を出せなかったこともあり、母国で日本語教師をやっているような上級レベルの参加者が、全て完璧な答えを即座に回答されてしまった。そのため、次にすすまざるを得ない状況になってしまい、わかっていない参加者を取り残すばかりとなってしまった。

⇒・2日目以降は参加者の発話量を調整する、コントローラーという役目を持つ人を設置

- ・全員が集まる場所で自由に発言してもらうことはオンライン上では難しいとわかったため、極力ブレイクアウトルームを活用する方針へ変換

#### 1日目全体の運営面について

##### 【反省点・改善策】

①学習者のレベルに大きな差があった。

〈原因〉説明会での学習者のレベル把握が上手くできていなかった

- ・おしゃべりタイム(面談)での質問がとても簡単なものになってしまった。
- ・1対1の会話のみで、レベルをみてしまっていた。

- ・日本語学習者のレベル基準を理解できていなかった。

〈講じた改善策〉

- ・初中級レベルの学習者もついてこられるよう、発話を要約しチャットで送る。
- ・学習者の特性を踏まえ、グループ分けを工夫した。
- ・パワーポイントや資料（末尾に付録）を簡潔にし、ふりがなを付けた。
- ・重要なポイントは2回繰り返すなど話し方を工夫した。

②役割分担ができていなかった。司会のみ分担を行っていた。

〈講じた改善策〉 司会に加え、以下の役割を配置した。

タイムキーパー：時間管理(タイムテーブル作成)

コントローラー：学習者の発言量調整、司会の補助

ブレイクアウトルーム作成担当←時間がかかる作業であったため配置

要約筆記担当←理解度の差があることがわかったため配置

2) 2日目

### アイスブレイク ポテトチップスを食べる

【よかった点】

- ・学習者が進んで自分の持ってきたポテトチップスの、味やパッケージ、どれくらい有名なのか等について発言ができていた。
- ・食感を表す時、自然にオノマトペを使用して提示できた。
- ・学習者がオノマトペを使ってポテトチップスの説明ができていた。

【改善点】

- ・ポテトチップスが嫌いな学習者さんもいた。個々の好みまでは配慮できていなかった。
- ・ブレイクアウトルームの人数を8-10人ほどにしたが、人数が多かったために発言しづらそうな雰囲気があった。

### アイスクリーム宣伝

【よかった点】

- ・「宣伝」という言葉を、具体例を用いて説明することで理解を促すことができた。
- ・チームごとの活動では、積極的な意見交換がなされた。それにより、とても面白い宣伝がいくつも生まれた。

【反省点・改善策】

- ・パッケージから食感を想像するアクティビティは、あまり楽しそうではなかった。上のアイスブレイクを含め、もうひと工夫が必要だった。
  - 例えば、アイスブレイクを自分の好きな商品を紹介するアクティビティにすれば、パッケージから商品を予想する素地ができたのではないか。
  - また、パッケージもたくさん提示するのではなく、少なく絞り予想する形でも面白かったのではないか。
- ・日本語力の差によって、色々と話せる学習者とそれを聞いているだけの学習者に分かれてしまった。

### 日本のアイスクリーム（ハーゲンダッツ）CMを見てみよう

【よかった点】

- ・「パリパリmeetsメロメロ」という、学習者の興味を引くフレーズを、オノマトペの関心に結びつけることができた。

- ・(上記に関連して)ブレイクアウトルームでは、多くの意見交換がされた。
- ・アイスブレイクのポテトチップスで使った「パリパリ」というフレーズが良い導入となった。

#### 【反省点・改善策】

- ・「パリパリmeetsメロメロ」の解答・補足説明が不十分なものとなってしまった(要因としては、授業時間の把握不足と資料説明不足による)。特に、「メロメロ」の意味に関しては、CM内特有の意味合いもあったため、混乱が生じてしまった。
- ・上級者のブレイクアウトルームでは、フレーズが簡単だったためか素早く解答が出てしまい、手持ち無沙汰になる場面があった。レベル差のあるクラスでは、レベル設定を明確にした上で、上級者向けに $+\alpha$ の対応ができるよう、事前に準備しておく必要がある。

#### コンテスト説明・準備(チーム名決め・テーマ決め)

##### 【よかった点】

- ・コンテスト説明は簡潔に分かりやすく伝えられた。
- ・アイスクリーム宣伝で顔合わせをしていたことから、初回に比べてスムーズに話し合いを始めることができた。
- ・チーム内でリーダーを指名したことで、学習者が主体となって進めてくれた。

#### 【反省点・改善策】

- ・コンテスト内容を学習者に配布していなかったことから、内容について学習者への情報の伝達があまくいっていなかった。学習者が内容を手元で見られるよう、各班で繰り返しリマインド、資料配付等工夫をすべきだった。
- ・CM班として集まるのが初回であったこともあり、東女生の発話量が多くなってしまった。回を重ねるごとに、立ち位置を確定させていく必要がある。

### 3) 3日目

#### CMにオノマトペを入れてみよう！:オロナイン軟膏

##### 【よかった点】

- ・活発に議論が交わせた点。
- ・1日目に行った「規則性を知る」ワークを生かし、オノマトペを作ったり推測したりできた点
- ・Canvaを実際に使う練習ができた点。

#### 【反省点・改善策】

- ・終了後に、CMを見せなかった。  
⇒答えを見たかったという声も上がったため、提示する必要があると感じている。
- ・Canvaの操作が難しかった。  
⇒事前にもう少し東女生が練習しておくこと、また、何か障害があったときの対応策も考えておくべきだった。
- ・オノマトペが間違った使い方をされている場合、どうすべきか考えていなかった。  
⇒自由にオノマトペを入れるとはいえ、どこまでを許容しどこからを指摘するか、しっかり考えておくべきだった。  
⇒これは、オノマトペに対する知識の浅さに起因するものと思われる。オノマトペについて、見識を深める必要があった。

### 4) 4日目

#### アイスブレイク:ワードウルフ

##### 【よかった点】

- ・スライドを使いながら、実際に私たちが司会者、ゲームメンバーに分かれて実演する形でルール説明を行ったため、ほぼ全員にルールをスムーズに理解していただけた点。
- ・初日には発言量が少なく、心配していたような学習者の方々も、楽しみながら積極的に発言しており、ゲームが大変盛り上がった点。
- ・全員が発話する必要があるゲームなので、発話量も同じくらいにできた点。

#### 【反省点・改善策】

- ・反省点がほとんどないほどうまくいったが、とてもいいゲームであったため、もう少し時間をとって良かったかもしれない。

### CM作成・コンテスト準備

#### 【よかった点】

- ・各チームで、東女生側に頼らずとも参加者の方々が積極的にアイデアを出し合い、創意工夫に満ちた作品を作ることができた点。

#### 【反省点・改善策】

- ・作業量が多く、どうしても時間外の作業が生まれてしまい、学習者の負担になってしまった。事後アンケートでも、時間外の作業に対する負担が重かった、というような声が寄せられた。

### 5) 5日目

#### 最終調整

#### 【よかった点】

- ・5日間を通して、学習者が主導となって進行ができるようになっていた点。
- ・想像以上にたくさんのオノマトペを入れてCMを作ることができていた点。
- ・各自が発表に向けて準備ができていた点。

#### 【反省点・改善策】

- ・19:30から20:15まで最終調整の時間だったが、20:00までは任意参加であったので20:00から最終準備に入った学習者には準備時間が足りなかった可能性がある。
- ・20:05から聴講者の方が入室できたが、間違えて待機室からの入室を許可してしまう場面があり、そのフォローで焦ってしまった。

### UMCMコンテスト

#### 【よかった点】

- ・タイムテーブル通りに進めることができた点。
- ・学習者のほとんどが発表内で発言できていた点。
- ・クオリティの高いCMを発表できた点。
- ・投票、集計をスムーズに行えた点。
- ・質問への返答をしっかりとできていた点。

#### 【反省点・改善策】

- ・聴講者の人の中に、学習室からアクセスしている方がいて、音が入ってしまうので、急遽「発言するとき以外はミュート」にした。そのため普段の授業よりは、学習者が発言しづらかったかもしれないと感じた。
- ・タイムキーパーを行うときに、コンテストの大まかなタイムテーブルを用意していたが、各班の発表が何時から何時までなのかまで、細かく計算をしておくべきであった。

## CMの振り返り・5日間の振り返り

### 【よかった点】

- ・学習者同士が自ら進んで話をできていた点
- ・5日間の振り返りで、今までやってきた内容を覚えていてくれて、どういう部分が印象に残ったのかなど具体的に話をしてくれた点

### 【反省点・改善策】

- ・文章量の制限や、発表見本の提示をしなかったため、文章量に偏りがあった。
- ・振り返りの時間が5分ずつしか取れなかった→最終回だけ時間を伸ばして120分授業と計画しても良かったかもしれない。

## 8. 5日間のまとめ

### 1) 反省点

- CM作成の負担が大きかった。
- オノマトペについての知識が不十分だった(想定外の質問への対応ができず)。  
【改善策】質問を一度持ち帰り、全員で話し合いを重ねた後、回答をメールで配布した。
- 知識を入れる機会が少なかった。  
【改善策】知識分野の内容を簡潔にまとめ、ハンドアウトを作成しメールで配布した。

### 2) よかった点

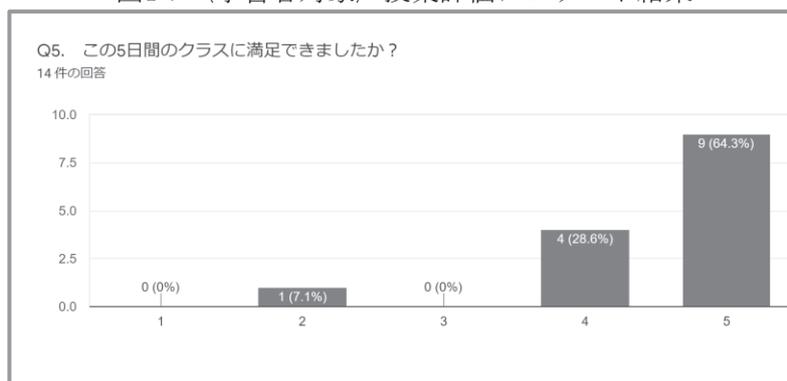
- 班分けを工夫し、多くの参加者と交流できるようにした。
- 満足度の高い楽しいクラスにすることができた。(以下参照)

〈学習者から寄せられたコメント引用〉

“今まで参加したオンラインイベントで一番楽しかった”

“またこういうイベントがあれば絶対に参加したいです”

図1：〈学習者対象〉授業評価アンケート結果



※2をつけた理由(回答) “もっと長くてほしいんです。” (原文ママ)

- 反省すべき点は翌日には改善、それぞれがクラス運営に尽力した。(以下参照)

〈学習者から寄せられたコメント引用〉

“オンライン授業とCanvasやgoogle docなどを使用したコースを管理するのは、教師にとっても

チャレンジなことで、うさぎムーンチームは予想外の事態にうまく対応できたと思います。”

“学習者のためにいろいろ準備してくださったところ、そしてCM活動のためにいろんな例を見せて分かりやすくしてくれたこと。指導役の方たちがいつも笑顔で対応してくれて、親身になっていたところ。”

### 3) 学んだこと

- 学習者の特性や日本語能力における詳細な把握の重要性

授業内での言葉選びや班分けの材料として、事前に把握しておくべきであると感じた。説明会では、おしゃべりタイム(簡単な会話、やりとり)を行ったが、十分に把握できているとは言えなかった。詳細なレベル把握ができるような方法を模索する必要があった。

- 教師の役割

学習者の発話量を増やすためには、授業の主軸を学習者に置くこと、教師側はファシリテーターとなる授業づくりが重要であると学んだ。

- オンライン授業の特性

対面の授業とは異なり、Zoomの使用方法(ホスト・運営側特有のもの)や通信環境のトラブル等は把握しておくべきであると感じた。

- 臨機応変な対応が求められる

- チームワーク

全員で全ての活動に携わることで状況に応じて柔軟な進行や補助ができ、5人で活動する意義を感じることができた。

### 3日目 CM作成時の話し合いの様子





※そのほかの例

「パンッ」「パンパン」 「コンッ」「コンコン」  
「ニコッ」「ニコニコ」 「キラッ」「キラキラ」

### <擬音語と擬態語>

音や声を言葉で表したもの ⇒ 擬音語

様子などを言葉で表したもの ⇒ 擬態語

※擬音語としても、擬態語としても使う言葉があります。

(例)

・ゴロゴロ

「雷がゴロゴロと鳴る。」(擬音語)

「家で一日中ゴロゴロしている。」(擬態語)

・カラカラ

「箱を振ると、中からカラカラと音がする。」(擬音語)

— — — —

「暑い中歩き続けて、のどがカラカラだ」(擬態語)

— — — —

※カラカラは、擬音語と擬態語でアクセントが違います。

・コツコツ

「ハイヒールを履いて歩くと、コツコツと音が鳴る。」(擬音語)

「テストでいい点を取るために、コツコツ勉強している。」(擬態語)

擬音語と擬態語を合わせて、「オノマトペ」と言います。

◆ ひまわり ◆

「『鬼滅の刃』の聖地に行こう！  
旅行計画を立てよう！」

池田心

伊豆田理奈

今出絢

大川紗直

## ひまわりチーム

池田心  
伊豆田理奈  
今出絢  
大川紗直

### I. テーマ

オンライン日本旅行

『鬼滅の刃』の聖地を巡ろう！旅行計画を立てよう！

### II. 目標・詳細

自分の経験が話せるようになる。感想を伝え合うことができるようになる。説明ができるようになる。対話を通して発音の練習になる。

⇒コミュニケーション能力の向上に繋げる。コロナ禍で減ってしまった他者との交流の場を設け、好きなものを通して楽しみながら、今までに習った日本語のアウトプット力を養うこと。

### III. 学習者の概要

1. 対象レベル：中、上級
2. 参加人数 13名（女性12名、男性1名）
3. 学習者一覧

出身国	性別	所属	出欠
タイ	女性	東京工業大学	全日
イタリヤ	女性		全日
日本	女性	高校生	1,4日目欠席
シンガポール	女性	中学生	3,4日目欠席
中国	女性		全日
インド	女性		全日欠席
中国	女性		5日目欠席
台湾	女性		全日
ブラジル	女性	ロンドリーナモデル校	3,4日目欠席
ロシア	女性	イーストウエスト日本語学校	全日
中国	男性	イーストウエスト日本語学校	全日
韓国	女性	イーストウエスト日本語学校	全日
中国	女性	イーストウエスト日本語学校	全日

#### IV.開催概要

1. 日時：8/11（水）,8/12（水）,8/17（火）,8/18（水）,8/19（木） 18：30～20：00
2. 申込期間：7/15（木）～8/6（金） ※定員が集まり次第受付終了予定

#### V.スケジュール

- 7/2 仮ポスター案
- 7/6 説明会日程決定・説明会アクティビティ&内容決め
- 7/9 東京工業大学の先生へのメール案を考える（広報をお願いするメール）
  - ①説明会（21日）9月チームとの合同をやるかどうかの話し合い
  - ②日ごとの目標と内容決め
- 7/11 ミーティング
- 7/12 11：00 修正後ポスター案提出  
16：30 修正後ポスター案提出 2回目
- 7/13 ミーティング  
9：00 修正後ポスター案提出 3回目
- 7/14 完成版ポスター案提出
- 7/16 ひまわりチームミーティング、説明会リハーサル、9月チームと合同説明会練習
- 7/18 ミーティング  
18：30 説明会①
- 7/21 説明会リハーサル  
20：00 説明会②（9月チームとの合同説明会）
- 7/25 説明会リハーサル  
18：30 説明会③・参加希望者インタビュー
- 7/28 実習教案たたき台提出
- 7/30 ミーティング
- 8/1 説明会・参加希望者インタビューリハーサル  
18：30 説明会④・参加希望者インタビュー
- 8/2 ミーティング
- 8/4 説明会リハーサル・ミーティング  
18：30 説明会⑤・ミーティング
- 8/5 最終教案提出  
20：00 参加希望者インタビュー
- 8/8 教案訂正ミーティング、パワーポイント作成
- 8/9 教案訂正ミーティング
- 8/10 参加者へ事前確認メール、参加者名簿作成、リハーサル、最終確認
- 8/11 リハーサル練習、最終確認  
18：30 クラス1日目

- 20:30 振り返り
- 8/12 リハーサル練習、最終確認  
18:30 クラス2日目  
20:30 振り返り
- 8/15 ミーティング
- 8/16 ミーティング
- 8/17 リハーサル練習、最終確認  
18:30 クラス3日目  
20:30 振り返り
- 8/18 リハーサル練習、最終確認  
18:30 クラス4日目  
20:30 振り返り
- 8/19 クラス参加者へ手紙執筆、リハーサル練習、最終確認  
18:30 クラス5日目  
20:30 振り返り
- 8/20 最終振り返り
- 10/4 実習報告会に関する話し合い
- 10/8 実習報告会リハーサル
- 10/9 最終リハーサル
- 10/9 実習報告会

## VI.コース概略

### Day1

目標：交流を深める・お互いを知る（期待を持ってもらう）

内容：自己紹介をする・アイスブレイク（鬼滅の刃クイズ・好きなキャラクター紹介）・チームで話す（①鬼滅の刃を何で見えたか②なぜ鬼滅の刃を見ようと思ったか③オンラインクラスに参加しようと思った理由）・5日間の流れの説明・チーム発表・ワークシート例を見せる

### Day2

目標：提案する力を伸ばす、個人的意見を述べる、検索する

内容：写真を見せて、何話のどの場面か等聞く（アイスブレイク）

聖地の候補の場所を出していく

聖地の掘り下げ（聖地がある県の情報提供）

課題：どの聖地に行きたいか等考えてきてもらう

### Day3

目標：意見を交換しながらまとめていく、検索する

内容：ワークシートに書き出す・聖地のツアーを組み立てる

### Day4

目標：資料をまとめる力

ツアーを組み立てて、ワークシートに書きだす（食べ物・聖地でやってみたいこと・近くで行ってみたい場所）

## Day5

目標：聞いている人に分かるように発表する・意見を聞いて感想を述べる

内容：プレゼン練習・資料を見せながらグループ発表・感想・5日間のふりかえり

## VII.授業内容の詳細・良かった点／反省点

### 【1日目】

#### 目標

交流を深める・お互いを知る（期待を持ってもらう）

時間	活動	学習者の動き
18:30～ 18:33	<p>【1. 挨拶（3分）】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・オンラインクラスにおける注意喚起</li> <li>・個人情報の取り扱いについて</li> </ul>	
18:33～ 18:56	<p>【2. 自己紹介（23分）】</p> <p>話してもらう内容は4つ。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①名前</li> <li>②よばれたい名前・ニックネーム</li> <li>③出身国</li> <li>④みんなに一言・みんなに挨拶</li> </ol> <p>最初にひまわりチームのメンバーが自己紹介をする。 その後は、ファシリテーターがかけた順に発表してもらう</p> <p>全員が発表した後は、ZOOMの名前をニックネームにかえてもらう（ZOOMの機能をPPTをもとに説明）</p>	<p>自己紹介をする</p> <p>ZOOMの名前をニックネームに変更する</p>
18:56～ 19:30	<p>【3. クイズ&amp;キャラクター紹介（34分）】</p> <p>目的：鬼滅の刃を知らない参加者もクイズを通して鬼滅の刃について少し知ってもらう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キャラクターに関するクイズ5問</li> </ul>	

	<div data-bbox="387 230 786 439" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <small>いちじんの</small>  <b>二問目</b>          このキャラクターはだれでしょう   </div> <p>②キャラクター紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・参加者には事前に宿題を出している。</li> </ul> <p>→好きなキャラクターを1人見つけてきてもらうこと と他の人にそのキャラクターを好きになってもらえるような紹介を考えてくること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・クイズで出たキャラクターについての紹介を考えてきた方にはその都度発表してもらい、キャラクターに関する知識をみんなで深める。それ以外のキャラクターに関する紹介を考えてきた方には最後に発表してもらい、キャラクターの画像をみんなで共有しながら知識を深める</li> </ul>	<p>答えがわかる場合は挙手 →数名手が挙がった場合は同時に発表してもらおう</p> <p>考えてきた好きなキャラクター紹介を発表する</p>
<p>19:30～ 19:48</p>	<p>【4. グループワーク (18分)】</p> <p>目的：親睦を深める</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・5日間一緒に活動するチームにわかれて3つの内容について話す</li> </ul> <p>①鬼滅の刃を何で見たか ②なぜ鬼滅の刃を見ようと思ったか ③オンラインクラスに参加しようと思った理由</p>	<p>チームで発表する</p>
<p>19:48～ 19:59</p>	<p>【5. 5日間のスケジュール説明 (11分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・5日間のオンラインクラスの流れの説明</li> <li>・5日間のオンラインクラスで目標としている力の説明 (発表する力、自分の思っていることを他の人に伝える力、日本語で話す力を得ること・期待値の調整)</li> <li>・旅行計画をたてる時に使うワークシートの説明</li> </ul> <p>→完成版の例を提示 (詳細な説明は別日)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発表の手順・順番の説明</li> <li>・質疑応答</li> </ul>	
<p>19:59～ 20:00</p>	<p>【6. 終わりのあいさつ (1分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次回のオンラインクラスについての説明</li> <li>・授業後のおしゃべりタイムについて</li> </ul>	
<p>20:00～ 20:30</p>	<p>【7. おしゃべりタイム】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・参加自由のおしゃべりタイム</li> </ul>	<p>自由に話す</p>

### 良かった点

- ・非常にわきあいあいとした雰囲気で行進することができた
- ・「関係ないことだけど」とオリンピック選手と鬼滅の刃の関係に関する豆知識を発表してくれた方がいた。非常に積極的に参加されている方が多くいた

### 反省点

- ・ひまわりチームの他のメンバーに対してはちゃん付けで呼んでいるにもかかわらず、参加者にはさん付けという違いが生じてしまっていた
- ・教案外のアドリブの表現で難しい言葉を使用していた。「よろしければ」「ちなみに」「いらっしゃる」「もしくは」
- ・「麻婆豆腐の国出身なんですね」という言い方をしてしまった場面があった。食が侮蔑につながる可能性があるため、食と国のつながりに関して慎重になるべきだと感じる

## 【2日目】

### 目標

提案する力、個人的意見を述べる、検索をする。

時間	活動	学習者の動き
18:30～ 18:33	【1. 挨拶 (3分)】 ・オンラインクラスにおける注意喚起 個人情報取り扱いについて	
18:33～ 18:50	【2. 時代についての説明 (17分)】 ①日本と鬼滅の刃に登場する日本のイメージについて 大正・昭和・令和についての写真をみせて 学習者それぞれがもつ日本イメージについて聞く 	どの写真が自分のもつ日本のイメージに近いか、手を挙げる。

	 <p>②時代についての説明 時代の名前が変わる理由、天皇について</p> <p>③鬼滅の刃の舞台である大正時代の説明 ・実際の大正時代の動画と鬼滅の刃の登場するシーンの比較</p> <p><a href="#">【100年前の日本】大正時代の日本の動画 昔の映像。カラー - YouTube</a> (2:00 から 20 秒くらい)</p>  <p>・大正時代の衣食についての説明</p>	
<p>18:50～ 19:15</p>	<p>【3. グループワーク (15分) と発表 (10分)】</p> <p>①グループワーク ・どんな文化を日本らしいと考えますか。日本のイメージはどんなものかを聞く。 ・1人3分×3.4人 +東女生 東女生(画面共有で三枚の写真をだす。) 「では、始めます。 ●●さん、どの写真が一番日本らしいと感じますか？」</p> <p>②発表 グループの中から一人ずつ発表してもらう。 東女生が感想や意見をだす。</p>	<p>写真1, 2, 3, からいちばん日本のイメージに近いものを選んで、理由述べる。</p> <p>・発表者を決める</p> <p>グループのなかから一人発表する。</p>
<p>19:15～ 19:55</p>	<p>【4. 鬼滅の刃の聖地紹介 (グループワークを含めて 40分)】</p>	

	<p>・聖地紹介 八幡竈門神社、宝満宮竈門神社、柳生の里の「一刀石」、大川荘、あしかがフラワーパーク、明治村の6か所についてクイズを交えながら、紹介する。 所在地やどのシーンに出てきたのかを明確にする。</p> <p>・クイズについて</p> <p>①八幡竈門神社（大分県別府市） 炭次郎の苗字について問う。</p> <p>1. 竈門（かまど） 2. 富岡（とみおか）</p> <p>②宝満宮竈門神社（福岡県太宰府市） クイズなし、紹介のみ</p> <p>③柳生の里の「一刀石」（奈良県奈良市） ・オンライン日本語クラスの説明会で登場させた問い。 どんなシーンで登場したかを問う。</p> <p>④大川荘（福島県会津若松市） 下記の画像を見せ、どちらがアニメ、写真かを問う。</p>  <p>⑤あしかがフラワーパーク（栃木県足利市） ・アニメのシーン、実際の写真を出し、比較する。</p>	<p>炭次郎の苗字を全員が挙手にて答える。</p> <p>聖地が登場した場面について説明する。</p> <p>・考えを挙手にて示す。</p>
--	---	--

	 <p>藤の花が食べられることについて YES/NO で問う。</p> <p>・グループワーク フグにも毒があることを示し、学習者の国の食文化について、ブレイクアウトルームに分かれて話し合う。</p>  <p>⑥明治村（愛知県犬山市） 「明治村」の明治ということばは時代を表していることを説明する。明治という時代は大正時代よりも前だったか、後だったかを答えてもらう。 正解発表後、明治について時代の説明する。時代線グラフを示す。</p>	<p>・ 答えを挙手にて示す。</p> <p>・ それぞれの食文化について説明する。</p> <p>・ 挙手にて、問いに答える。</p>
<p>19：55～ 20：00</p>	<p>【5. 終わりのあいさつ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 次回までの宿題の説明</li> <li>・ 次回のオンラインクラスについての説明</li> <li>・ 質疑応答</li> <li>・ 授業後のおしゃべりタイムについて</li> </ul>	

良かった点

- ・ 学習者の興味を引きながら、聖地について紹介することができた点。
- ・ 説明が多い分、「ここまでで何か質問はありますか？」と問うことができた点。
- ・ 学習者の国の文化を知ろうというスタンスを持つことができていた点。

反省点

- ・ 準備段階で、使う言葉の易しさ（伝わりやすさ）を重視したため、実用性、現実味のない説明

になってしまっていた点。語彙を増やすことにもつながるため、避けるべき言葉と使うべき言葉の区別をする必要があることを学んだ。

- ・質問を募る文言を加えたが、正直に「分からない」と答える環境を作ることができなかった点。

- ・日本のことをきちんと伝えられる知識を持っていなかった点。

- ・意見を聴くときなど、微妙な間合いができてしまっていた。

### 【3日目】

#### 目標

意見を交換しながらまとめられるようになる、検索ができるようになる

時間	活動	学習者の動き
18:30～ 18:33	<b>【1. 挨拶 (15分)】</b> ・オンラインクラスにおける注意喚起 ・個人情報の取り扱いについて	
18:33～ 18:50	<b>【2. 振り返り (17分)】</b> ・前回の活動の振り返り ・宿題として課していた、それぞれの気になる聖地をチーム内で共有 ・学習者同士で話の進行をしてもらう	学習者同士で話の進行をしてもらう 気になった場所について発表する
18:55～ 19:02	<b>【3. 説明 (12分)】</b> ・以後行うグループワークの進め方の説明・完成版ワークシート（見本）の提示 ・グループワークに伴う検索の仕方の説明	

19:02～ 19:50	<b>【4. グループワーク (48分)】</b> ・旅行計画タスクシート作成	実際の日本の観光地 そこでやってみたい こと・その地域の有 名な食べ物について調 べ、共有する
19:50～ 19:55	<b>【5.発表】</b> ・チームごとにその日進んだところまでを共有	各チームの代表者にそ の日のグループワー クでの 進捗状況や 感想を共有して も らう
19:55～ 20:00	<b>【6. 終わりのあいさつ】</b> ・次回のオンラインクラスについての説明 ・質疑応答 ・授業後のおしゃべりタイムについて	

#### 良かった点

- ・今までは学生が話の進行を行っていたが学習者同士で話し合いを進めていったり話を聞きあったりするようになった。
- ・雰囲気の良いこともあり、学習者の方からもっと親睦を深めるために line グループを作りたいという提案が出された。

#### 反省点

- ・クラス内での発言がより自由化したことに伴い、学習者によって発言量に少々ばらつきが生じるようになってきてしまった。
- ・検索の仕方を日本語での検索の仕方として紹介したが、人によっては母国語で調べている人もいた

#### 【4日目】

##### 目標

- ・日本について「旅行計画」の組み立てを通してさらに知ることができる。
- ・相手の意見を聞き、また同時に、自分の考えを理由などをつけて伝えられるようになる。

時間	活動	学習者の動き
18 : 30～ 18 : 33	<b>【1. 挨拶 (15分)】</b> ・オンラインクラスにおける注意喚起 ・個人情報の取り扱いについて	
18 : 33～ 18 : 50	<b>【2. 振り返り (17分)】</b> ・前回の活動の振り返り ・各チームの旅行計画テーマを共有 ・今回の活動の確認 ・発表の手本を見せる	チームの代表者が チーム名とテーマ を発表
18 : 50～ 19 : 55	<b>【3. グループワーク (65分)】</b> ・旅行計画タスクシート作成  ↓完成したワークシート  <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>『鬼滅の刃』の聖地に行こう！旅行計画を立てよう！</p> <p>チーム名 ライジングサンダー☘</p> <p>テーマ 雄鬼(げんいつくんの後継(ごうはい)をめざす旅行！鬼の呼吸(かみなりのこきゅう)を感じましょう</p> <p>～1日目～</p> <p>聖地 大川荘 (おおかわそう)</p> <p>聖地の説明 鬼舞辻 無惨(きぶつじ むざん)と鬼たちが会議(かいぎ)をする場所。 実演(じっさい)は披露。 アニメでは琵琶(びわ)を演奏(えんそう)して鬼を追い払う。</p> <p>行きたい理由 むざんの迫力(はくりょく)を体験してみたい！アニメで見てクールだったから 旅館(りやういん)でゆっくりできそう</p> <p>この地域(このち)はどんな場所(なんなところ)なの？</p>  <p>昼 お昼(おひる)ごはん：ねぎそば(ねぎそば)を食べる 箸(はし)のかわりにねぎ(ねぎ)で食べます！勇氣(ゆうき)のある方はぜひ(ぜひ)食べてください</p>  <p>いい 五色沼(ごしきぬま)に行って写真(しやうしん)をとる 太陽(たいやう)のようすや 天気(てんき)によって色(いろ)がかわる</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p>聖地がある場所 福島県</p> <p>観光(かんかん)スポット ・五色沼(ごしきぬま) ・三春滝桜(みはるたきさくら) 東日本大震災(ひがしにほんだいしんさい)でもたおれなかった 立派(りっぺい)な桜(さくら)</p> <p>食べたいもの ・ねぎそば(勇氣のある人(ゆうきのあるひと)食べてみてくださいさい！) ・クリームボックス 食パン(しやうぱん)の上に、たっぷりのミルク(ミルク)クリーム！台湾(たいわん)の朝ごはん(あさごはん)に似て(にそ)います</p> <p>やりたいこと ・五色沼(ごしきぬま)で写真(しやうしん)をとりたい</p> <p>～スケジュール～ 朝(あさ)ごはん：クリームボックス(クリームボックス)を食べる</p>  <p>三春滝桜(みはるたきさくら)を見に行く</p> <p>夕方(ゆふがた)：大川荘(おおかわそう)に泊まり(とまり)ましょう</p>  <p>夜(よ)</p> </div> </div>	実際の日本の観光地(じつじやうのにっぽんのかんかんち)・そこでやってみたいこと・その地域の有名な食べ物(そのちゆうの有名なたべもの)について調べ、共有(きゆうやう)する

19 : 55～ 20 : 00	<b>【5. 終わりのあいさつ】</b> ・ 次回のオンラインクラスについての説明 ・ 質疑応答 ・ 授業後のおしゃべりタイムについて	
---------------------------	--	--

#### 良かった点

・日本の観光地を知ることに関心を持っている参加者の方が多く、「実際に日本でこの場所に行ったことがある」という経験や、「雑誌やネットで見たことがあり行ってみたい」という意見を率先してたくさん共有してくれた。そこから深掘り質問などを行うことで、参加者の発話量を増やすことに繋がられた。

・調べる時間に制限を設けた（例：10分間で調べましょう）ことで、グループワーク中に雰囲気はだらけることなくメリハリのある作業ができた。

#### 反省点

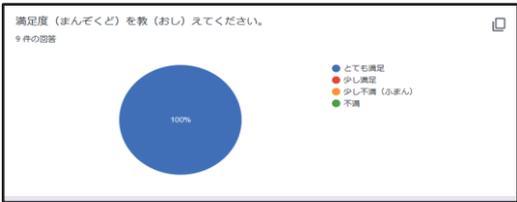
- ・タスクシートの作成をしながら参加者に気を配ることが想像以上に大変だった。
- ・相槌が適当になってしまったり、話題の膨らませ方を上手くできなかった点。
- ・日本のことをきちんと伝えられる知識を持っていなかった点。
- ・意見を聴くときなど、微妙な間合いができてしまっていた。

### 【5日目】

#### 目標

聞いている人に分かるように発表する・意見を聞いて感想を述べる

時間	活動	学習者の動き
18 : 30～ 18 : 35	<b>【1. 挨拶（5分）】</b> ・ オンラインクラスにおける注意喚起 ・ 個人情報の取り扱いについて	
18 : 35～ 18 : 57	<b>【2. 練習（22分）】</b> ・ チームにわかれて、発表する順番を決め、発表練習を行う ・ 東京女子大生は画面共有を行う	チームにわかれて発表する順番を決める。発表練習を行う。
19 : 00～ 19 : 37	<b>【3. 発表（37分）】</b> ・ 発表→他チームのメンバーから感想・質問 ・ ①みずのとチーム ・ ②食いしん坊チーム ・ ③ライジングサンダー ⚡ チームの順番 ・ 東京女子大生は画面共有を行う	発表する 発表時、見せたい画像があれば画面上で提示  他チームの発表に感想・質問があれば挙手

19:37～ 19:45	<p>【4. 5日間の振り返り・チームで楽しかったことや得た力等の振り返り（8分）】</p> <p>①スライドを用いて5日間を振り返る</p> <p>②ブレイクアウトルームにて5日間を振り返る</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・5日間の目標を達成することができたか</li> <li>・楽しかったこと</li> <li>・できるようになったこと</li> </ul>	<p>1日目～5日目の活動をそれぞれ一枚ずつまとめたスライドを見ながら何をしたか覚えている人が口に出す</p> <p>チームに分かれて5日間を振り返る</p>
19:45～ 19:57	<p>【5. 全員の前で5日間の感想発表（11分）】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・5日間の感想を一人一言ずつ発表してもらう</li> </ul>	5日間の感想を発表する
19:57～ 20:00	<p>【6. 終わりのあいさつ（1分）】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケートに答えてもらう</li> </ul>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・最後のまとめ</li> <li>・授業後のおしゃべりタイムについて</li> </ul>	アンケートに答える
20:00～ 20:30	<p>【7. おしゃべりタイム】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・参加自由のおしゃべりタイム</li> <li>・手書きのメッセージをチャットで送付する</li> </ul>	自由に話す

#### 良かった点

- ・発表が恥ずかしい、苦手な方が多くいたことを知った。しかし、満足度100%で終わることができ、楽しかったとも言ってくれていたため、内容的にも良かったと感じている
- ・鬼滅の刃というテーマだったため、難しい言葉やわかりづらい言葉は鬼滅の刃と絡めて説明をすると理解しやすくなることを学ぶことができた

#### 反省点

- ・最初に感想をだれかお願いしますと聞いた時に誰からも手が上がらなかったため、アドリブで最初の1人を当て、当たった人が他の人を指名していくという形で進めたが全員その形式でやってしまった。最後に当てられずに残ると寂しさや悲しさがのこってしまうため、最後の5人はこちらからあてるという形にした方が良いことを学ぶことができた

#### VIII.まとめ

- ・初めてのオンライン実習ということで不安があったがオンラインだからこそ一人一人の表情や雰囲気を読み取りやすく、内容がわからない人を発見しやすいという利点を見つけることができた

た。

・おしゃべりタイムを最後に設けたことでより仲が深まったと感じる。想像以上に多くの方が毎回残ってくださり、最終日には全員残ってお喋りをした。学習者の提案から LINE グループが作られ、実習後オンラインお話会も実施された。

・年齢やレベル感を合わせる必要があると強く感じた。あまりにも年齢差が大きすぎると背景の知識も大きく異なるため、全員のレベルにあった内容を作ることが難しくなると感じた

・オンラインは参加方法を聞くことが大切であると感じた。今回、端末一台から二人の方が参加していたが二人が同時に参加するのではなく、交互に参加することが多々見られた。他の方の意欲を下げてしまう可能性もあるので事前に聞くことが大切であると学んだ。

・私たちがすべてをサポートをする必要はないことを学ぶことができた。学習者から学ぶことやサポートされることの方が多く、すべてをわたしたちがやらなければならないという意識を持つ必要はないことを知った。

◆実習報告◆

学外実習  
(フィールド実践 B・C)



## ●2021 年度 学外実習受け入れ機関●

### 実習受入先日本語教育機関

- ・株式会社 インターカルト日本語学校 東京都台東区台東 2-20-9
- ・株式会社ケー・エイ・アイ カイ日本語スクール 東京都新宿区大久保 1-15-18 3階
- ・学校法人 江副学園 新宿日本語学校 東京都新宿区高田馬場 2-9-7
- ・財団法人ラボ国際交流センター ラボ日本語教育研修所 東京都新宿区西新宿 6-26-11

### 実習期間

受入れ日本語教育機関	実習期間
インターカルト日本語学校	《短期》 9/6～9/17
カイ日本語スクール	《長期》 7/12～7/30
新宿日本語学校	《長期》 6/28～8/6
ラボ国際交流センター ラボ日本語教育研修所	《長期》 7/5～7/28



◆ インターカルト日本語学校 ◆

李炫知

大山紗和

澁谷こはる

滝川凜

## 【インターカルト日本語学校について】

1977年に設立された日本語学校で、秋葉原駅から徒歩約17分のところにある。コースは長期コース、ウィークリーコース、日本語教師養成コースの3つで、今回私たち4人は長期コースで実習を行った。実習当時は30か国190人が在籍しており、コロナの影響でお国からZoomで授業に参加する学生もいたため、対面とオンラインのハイブリッド型授業が行われていた。

「日本語を学びたい、すべての人のために」というモットーを掲げ、学びたいことが学べる学校、そして「使える」日本語を身につけられる学校として、知識よりも実用的に日本語使えるか、自分の表現したいことが表現できるかということを重視している。

## 【実習内容】

期間は9月6日（月）から17日（金）の平日で、実習の時間は殆どの日程で12時前後から17時半となっていた。（1コマ50分、休憩時間10分）実習初日に自己アピールポスターを作成し、ホームクラスと教員室入口に掲示していただいた。

ホームクラス、漢字クラス、目的別授業に参加させていただいた。私たち4人は2人ずつに分かれてホームクラスの授業に参加し、先生たちの言動や学生の様子、授業の雰囲気、そしてZoomでの授業参加者の様子も見学させていただいた。実習期間中は授業後に、先生方からのフィードバックや質疑応答の時間を設けてくださった。授業に加えて、先生方によるレクチャーの時間も設けてくださり、インターカルト日本語学校や日本語教育業界にまつわるお話をしてくださった。

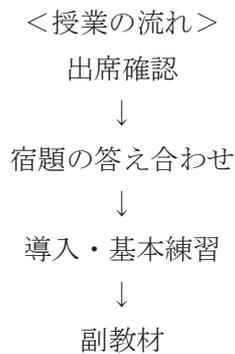
9月15日（水）にはスピーチ大会が開催され、私たちは見学だけでなく東京女子大学として投票もさせていただいた。

最終日である9月17日（金）にそれぞれが担当するホームクラスで教壇実習を行った。今回は「Vル/Nの代わりに」と「Vテくる/いく」の文法を担当し、同じ文法を担当するメンバー同士で意見交換をしたり、先生方からアドバイスをいただいたりしながら、教案を作成した。

## 【ホームクラス】

ホームクラスの実習では、元々初級レベルのクラスに参加する予定だったが、コロナウイルスの影響で、多くの学生が来日できなかった状況により、中級レベルであるJ3に参加することに変更された。ここで「J」は日本語（Japanese）の略称である。

J3 レベルのクラスは、人数によって J3a と J3b、J3c で分かれており、1 クラスは 16 名程度である。国籍は、中国圏からヨーロッパ圏まで様々な地域出身の学生が在籍していた。また、年齢層も幅広い。J3 レベルでは教科書として『中級へ行こう』を使用している。それに加えて、授業の内容によって先生が作成した適宜プリントやパワーポイントも使用していた。授業の流れは、先生や授業内容によって前後が変わる場合もあったが、基本的に以下の通りに進んでいた。



#### ○J3a について

ヨーロッパ圏とアジア圏の様々な地域出身の学生が日本語を学んでおり、漢字圏出身の学生がクラスの 2/3 ほど在籍していた。特に中華圏（漢字圏）の学生が多かったため、漢字語は理解できていても、外来語や和製英語の発音がよく分からない人が多かった。また、同じクラスに集まっても、その中の学生たちの日本語を学ぶ目的や学習環境はそれぞれ違っていた。

コロナウイルスの影響で、授業はオンラインと対面が同時に進むハイブリッド型で行われた。オンライン授業は、ズームをツールとして利用していた。先生は対面とオンラインの両方の発話機会を平等に当てようと気を配っていたが、現実的に時間が足りなかったり、インターネットの接続が悪いなどの問題が発生した場合には、対面の方を優先していた。この優先順位に関しては、事前にオンラインで参加する学生たちの理解を得た上で行われていた。

そして、教室内（対面）でも先生の質問に積極的に答える学生とそうではない学生の差が見られていたが、授業内では発言が少ない学生でも、休み時間には学生同士で日本語で会話している場面もみられ、日本語が学生同士のコミュニケーションツールになっていることが分かった。

#### ○J3c について

ヨーロッパやアジア、アメリカなど、様々な地域出身の学生が日本語を学んでおり、漢字圏出身の学生がクラスの 2/3 ほど在籍していた。授業中に積極的に発言や質問をする学生がおり、Zoom 参加の学生であっても主体的に発言する学生も見られたため、双方向的な授業形態であった。

座席は漢字圏と非漢字圏出身者でまとまっていたため、学生同士は英語や中国語でコミュニケーションをとっていたが、休み時間には日本語でコミュニケーションをとっている様子も見られた。分からない語彙がある時は教師に質問しやすい環境が整っていたため、理解できないまま取り残されてしまうことがないと感じた。

何度も同じクラスで見学させていただいたため、クラスの雰囲気を掴むことが出来ただけでなく、学生との会話の機会も増えた。学生は休み時間になると、日本語で私たちに話しかけてくれたり、自己アピールポスターに書いたことについて質問してくれたりした。

## 【漢字の授業】

漢字の授業では漢字だけでなく、カタカナのアクセントを教えていた。また、クラスを漢字圏と非漢字圏で分けて授業を行っていた。

### ○漢字圏

漢字圏の授業では、漢字の意味やその漢字が入った熟語の説明を中心に教えていた。さらには、プリントで熟語の読みを確認したり、方位磁石コンパス、署名はサインというように英語で言い換えることもあった。カタカナはアクセントの確認をし、日本語っぽい発音をするように、また、チャンスをつかむ、コミュニケーションをとるなどのコロケーションも教えていた。また、カタカナであっても漢字の読み方であっても濁点を注意して教えていたことが印象的だった。

### ○非漢字圏

漢字圏と同じく、漢字とカタカナのアクセントを教えていたが、非漢字圏の学生は漢字の書き方から学ぶため、最初に漢字の書き方のプリントを用いて文字の形を教えていた。その後は、その日に学ぶ漢字を使った熟語を教えることで、様々な読み方や意味を教えていた。漢字の熟語を教えるときもプリントを用いる先生がいらっしゃって、そのプリントは熟語の部分ではなく、文法であったり、以前学んだ熟語の部分が空欄になっており、漢字や文法の復習も同時に行えるようになっていた。また、意味の確認として、「この言葉は英語ではなんといいますか。」と学生に聞き、英語を用いて意味を確認する場面も見られた。カタカナは基本的に漢字圏のクラスと同じではあったが、それぞれの国ではどのような発音なのかを学生に聞くことで、学生の発言を促したり、学生自身に関係することを話せる場になっていたように感じた。

## 【レクチャー】

実習期間に4つのレクチャーの時間を設けていただいた。日本語教師として活躍している方々のお話はどれも刺激的で、たくさんの学びを得ることができた。

以下では、それぞれのレクチャーの概要と学んだことについて述べていく。

### ① レベル別授業クラスについて

インターカルト日本語学校の教育理念「日本語を学びたいすべての人のために」や在籍している学生、授業についての説明を受けた。

コロナ禍で留学生数は大幅に減少しているが、そのような状況下でも日本語学校として日本語を学ぶ意欲のある学生を色々な面からサポートしていることを学んだ。

## ② さまざまな目的別クラスについて

インターカルト日本語学校の特徴のひとつである目的別クラスについて、その概要や種類の授業が展開されているか説明を受けた。授業の内容は試験対策や漢字、読解、会話、日本史など幅広い。

同じ日本語学校に通っていても、学生によって日本語を学ぶ目的は異なるため、どんな目的を持った学生であってもその目的に合った「使える日本語」を学べる授業を選択できるように、さまざまな授業が用意されていることを学んだ。

## ③ 漢字指導・漢字クラスについて

インターカルト日本語学校では、漢字のクラスを「漢字圏」「非漢字圏」で分けている。まず、非漢字圏出身の学生は、漢字の読みも意味も一から学ぶことになる。それに対して漢字圏出身の学生は、漢字の意味は理解できても読みに苦戦してしまうことが多い。このように、漢字圏・非漢字圏の学生それぞれで「難しい」と感じる部分が異なることを学び、インターカルト日本語学校では学生に合った漢字の授業が展開されていることを知った。

## ④ 日本語学校・業界について

2週間の教育実習を終えてどう感じたか、「将来はどのようにありたいか」について校長の加藤早苗先生とお話しした。加藤校長先生のご経験や研究、夢についてお伺いし、対話をすることで、日本語教育は日本語学校の教師としてのみ活かされるものではなく、社会に出た際最も必要な理念、価値観のひとつであるということを改めて学ぶことができた。

### 【目的別授業】

インターカルト日本語学校の特徴のひとつである目的別授業は、中級（J3）以上の学生が、それぞれの目的に合わせて選択する授業である。文法や読解、試験対策、日本の曲の歌詞を読み解く授業、さらに日本史や戦争について考える授業などがある。コロナの状況もあり、例年に比べて授業の種類が少なくなっているそうだが、さまざまな内容の授業が展開されている。今回見学させていただいたのは、「楽しい漢字」「日本語のなぞ」「楽しく話す」「発音トレーニング」「戦争って何だろう」の5つの授業である。

### ① 楽しい漢字

この授業は非漢字圏の学生が対象で、「漢字の面白さ」を感じられる内容の授業である。

今回は「形声文字」について学んだ。通常の漢字クラスでは説明されないような漢字の面白さを発見することができる。日本の常用漢字 2136 字のうち、発音のパーツがある漢字は 6 割にも及ぶと言う。漢字には発音のパーツがあることを知ることで、漢字を読むときの「コツ」を掴むことに繋がる。

例：<発音のパーツがある漢字>

A 往復 1 時間      B 成功、おめでとう！      C 電気代の請求書      D 電車の事故

### ② 日本語のなぞ

教科書では習わないような、日本語のきまりなどを学ぶ授業。日本独自の表現や暗黙の規則など、興味深い内容を取り上げていた。

例：<授業で取り上げられた内容>

- ・スカイツリーの高さ634(ムサシ)mは、昔の「東京」をさす「武蔵」に由来するもの。
- ・日本において数字の4は「死」を連想させるため、ホテルの客室番号等には用いられないことがある。
- ・「春日部」や「久喜」は、もともと地名として用いられていた漢字を変更したものである。元々は「粕壁」「荃」であり、特に良い意味は持たないが、漢字を「良い意味」に変えることもある。

### ③ 楽しく話す

グループに分かれて、紙に書かれたテーマについてディスカッションをする授業。この授業では、「正しい文法」ではなく、「言いたいことを伝える」ことを重視していた。担当の先生にお聞きしたところ、「この授業は「話したい」と思って来ている学生の授業であるため、学生の発話を止めるようなことはしていない」とをおっしゃっていた。

もちろん正しい日本語も大事だが、このような会話の授業で「自分のことばで表現する練習」をすることで、社会に出ても役に立つ力を身につけることができるのだと考えられる。

ディスカッションのテーマは、正しい答えのないものを提示しており、学生間で活発に意見交換ができる場となっていた。

例：<ディスカッションテーマ>

- ・子どもがたくさん習い事をするということについてどう思うか
- ・高校生がアルバイトをすることについてどう思うか

### ④ 発音レーニング

学生が苦手とする「発音」を確認しながら、ひとりずつ自然な発音で発話する授業である。この授業では見学というよりも、私たち実習生も学生と同じように授業に参加する形だった。以下、学生が苦手な発音5点と、授業で発音した文章を紹介する。

(1) 長音

- ・東京航空高専こうくうこうせんの高校課程こうこうかてい

(2) 小さい「つ」

- ・あっちゃんのさっぱりサラダは、やっぱりおいしかった。
- ・四日は暖よっかかったです。とっても暖あたたかったです。

(3) ん

- ・新薬しんやくを発見はっけんするために日本へ来ました。
- ・婚約した日にこんにやくこんやくを食べた。

(4) は行

- ・春の日に花がひら開く
- ・お二人様ですか

(5) だ・な・ら

- ・体からだの不調ふちょうの表れあらわ
- ・道路どうろが濡ぬれる

⑤ 戦争って何だろう

見学した目的別授業の中で、この授業のみ上級クラスが対象。今回の内容は、沖縄の歴史を中心に戦争について考える授業であった。

日本で唯一起きた沖縄での地上戦について、スライドを用いた解説を聞いたり、THE BOOMの「島唄」を聞いたりして、沖縄独自の文化や日本との歴史を学んだ。授業の終盤には日本に米軍基地があることで何が起こるのかについて考えた。授業後には、学生が授業に関するコメントシートを書く時間を設けており、上級クラスとして自分の考えを話すだけでなく、文章にして書く力を鍛えることに繋がっていたと考えられる。

【スピーチ大会】

9月15日(水)に「第40回 インターカルト日本語学校スピーチ大会」が開催された。クラス代表者8名が学校内に設けられた特設ステージでスピーチを行った。スピーチのテーマは多岐にわたり、出場者は日本語で自分の想いを伝えた。以下にテーマと出場者の出身地を記す。

「日本人の厳しさ」 中国  
「日本で感じたウクライナ」 ウクライナ  
「30才」 中国  
「日本のヴィーガン」 コロンビア  
「日本のラーメン」 香港  
「永遠の外国人」 アメリカ  
「優しさのリレー」 中国  
「小さな愛」 韓国

新型コロナウイルスの影響で私たちはYouTube 配信を見せていただくという形で参加し、「東京女子大学」という枠で一位から三位の学生にグーグルフォームを用いて投票も行った。実習メンバー4人で通話をし、事前に提示された評価シートに基づいて投票先を決めた。また、出場者を各教室から応援するクラスメイトたちの様子も見ることができ、ホワイトボードに応援メッセージを書くなどして盛り上がっていた。

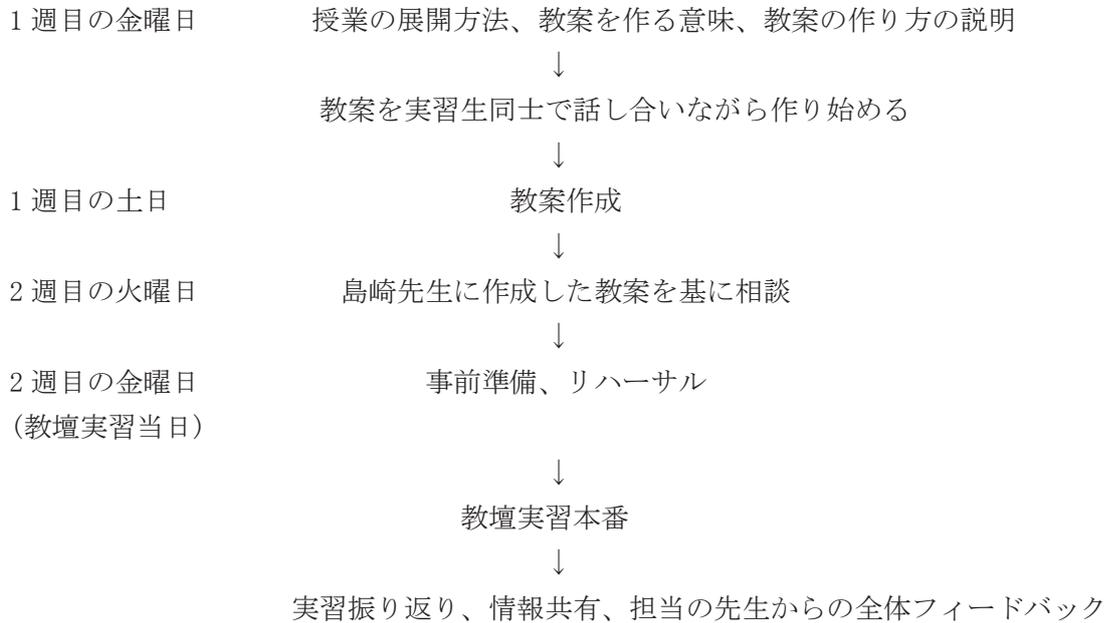
最優秀賞、優秀賞、学生賞、クラス代表賞など、最終的に順位がつき、受賞者には賞状やトロフィーなどが贈られた。日本に住んでいる私たちでは気づかないような着眼点に驚かされたり、学生が実際に体験した心温まるストーリーに感動したり、グローバル化が進む世界で今後真剣に考えなければならない問題について言及したりと、どのスピーチも心に響くものであった。また、自分の言いたいことを日本語で表現する楽しさや難しさに学生たちは気づくことで、このスピーチ大会は今後の日本語学習に対するモチベーションにも影響するであろう。

そしてこのスピーチ大会を通して、いわゆる「正しい日本語」ではなく「自分の想いを表現できる日本語」が重要であるということを感じた。正しい文法をいくら学んでも、言いたいことを相手に伝えられなければ困ってしまうため、実用的な日本語を習得する必要がある。それに加えて、「表現力」「説得力」も、コミュニケーションをとる上で重要なものである。このようなスキルを、楽しみながら向上させていくことが大切だと改めて考えさせられた。

### 【教壇実習】

教壇実習は、実習最終日である9月17日の金曜日にホームクラスの担任の先生の時間を頂き、各自20分間、会話形式で行った。授業内容は、「名詞+の代わりに」と「動詞+代わりに」、そして「ていく」と「てくる」の文法の導入から運用練習までであり、同じクラスに入る2人が一つずつ分けて担当していた。教案は同じ文法を担当するペアで一緒に作成したり、話し合いながら各自作成した。また、教材として板書と絵カードを主に使用しており、導入ではできれば多くの

学習者が共通的に知っている又は共感できる話題を用いることを意識して授業を展開した。教壇実習までには以下の通りに準備を行った。



(1) 名詞+の代わりに、動詞+代わりに

20分で「名詞+の代わりに、動詞+代わりに」の導入から運用練習まで絵カードと板書を用いて教壇実習を行った。李と澁谷は話し合いながら各自違う内容の教案を作成し、教壇実習を行った。

<感じたこと、気づいたこと>

- ・学習者が自然にその文法を使いたくなるようにさせることに注意していたため、自分から先に文法内容を言わないようにしていた。しかし、先に「代わりに」を言わずにその文法を初めて学ぶ学習者に言ってもらうのは、想像以上の高いスキルが必要な部分であったため、教案で導入を考案する段階が最も時間がかかったと思う。
- ・導入から運用練習に至るまでの例文を作る際、文法の仕組みを意識しすぎてしまい、無理に例文にさせてしまうことがあった。そのため、それを後でチェックし、直すことになかなりの工夫が必要だった。例えば、「動詞+代わりに」の例を作る際、「電車に乗る代わりに、バスに乗ります」という例文を出していたが、これは「名詞+の代わりに」の例文に当たる「電車の代わりにバスに乗ります」の方が自然な使い方である。つまり、学習者の理解に害を与える程度の不自然な例文なら使わない方が良いと感じた。
- ・授業の中で、学習者が言いそうな答えをできるだけ多く予想しておくことで、学習者が授業の流れに戸惑わずに文法をスムーズに理解できるようにすることに気を配っていた。
- ・板書の際は、少なくとも二色以上のカラーを使い、強調したい部分や重要な部分ははっき

りと見分けられるようにした方が良かったと思う。

- ・自分も緊張していたため、学習者の声が小さくてよく聞こえなかった時の反応に配慮が足りなかったと感じる。例えば、声が良く聞こえなかったため、もう一度答えてもらう時に「もう一度お願いします。」と言っていたが、その後の学生の反応は「私が何か間違ったのかな」という不安が感じられた。それで、このような時には「あなたの答えが間違っただけではなく、良く聞こえなかったからもう一度聞きます」ということを伝えた方が良いと考える。

## (2) ～ていく、～てくる

「～てくる、～ていく」の文法の教壇実習は、滝川と大山で相談しながら教案を作成したため、J3a、J3cともにほぼ同じような授業になったのではないかと思う。内容としては、20分で「～てくる、～ていく」の導入から、学生自身のことを答えられるような練習、その後はひたすら絵カードで運用練習をしていくという流れで進めていった。

### <感じたこと、気づいたこと>

- ・教壇実習の前に実習生同士で練習をした時にはスムーズにいていたことも、実際の授業では教案通りにはなかなかいかなく、授業を進行していく難しさを感じた。
- ・私たちが担当した文法は、会話の中で覚えていくというよりも、練習を何度も繰り返して使い方を理解するのが向いている文法だったと思った。そのため、より多くの練習問題を用意すべきであったと思った。
- ・初めての教壇実習で、自分でも気づかないうちに焦りが出ていたようで、学生に答えてもらうべきことを自分で言ってしまっていた。
- ・目の前にいる学生に伝えることで精一杯で、Zoomで参加している学生に対する配慮が足りていなかったと感じた。

反省点が多い教壇実習ではあったものの、学生の方々は協力的で積極的に発言をしてくださり、授業を最後まで進めることができた。授業後にはホームクラスの担任の先生からフィードバックをいただき、教壇実習での良かった部分、より良い授業にするためにはさらに何をすればよかったのかのアドバイスをいただいた。授業のカリキュラムも決まっている中で、20分という貴重な時間をいただいて教壇実習ができたことはとてもありがたいと思った。

9月10日（金）

12:15～13:05	レクチャー／漢字指導・漢字クラス
13:05～13:25	昼休み、教案相談、教案作成
13:25～14:15	
14:25～15:15	
15:25～16:15	
16:25～17:15	目的別授業／楽しく話す
～17:30	フィードバック

左の二つの表は、実習期間中のスケジュールの例である。

9月14日（火）

11:15～12:05	目的別授業／戦争って何だろう
12:15～13:05	
13:05～13:25	昼休み
13:25～14:15	ホームクラス
14:25～15:15	
15:25～16:15	教案相談
16:25～17:15	
～17:30	フィードバック

### 【まとめ】

滝川 一番印象に残ったのは学生との交流だ。私がアニメや漫画などの日本のポップカルチャーが好きだということを知って、学生が日本語で話しかけてくれたことが嬉しかった。「私は〇〇というキャラが好きです！」「日本のおすすめのアニメはありますか？」など、休み時間に盛り上がった。「日本語で何かを伝えたい、もっと話したい」という強い想いがひしひしと伝わってきて、この想いこそが彼らの日本語学習の原動力となっていることを感じた。この体験は日本語教育の現場でしか味わえないものであり、コロナ禍において私たちを受け入れてくださったインターカルト日本語学校の方々に感謝したい。

李 コロナ禍の中で対面での実習という貴重なお時間を頂き、実際に見たからこそ分かることも多く、非常に学ぶことばかりの二週間だった。二年生の時から授業の中でずっと言われてきた「学習者を一人の大人として見る」ことの本当の意味を実際の学習者と先生の関係を見て理解できたのが最も印象に残る。また、一人の学習者でもある私は、言語の「多様性」及び「存在意味」について考え直す機会を得た。そのため、文化の違いから

くる違い (Difference) を違い (Wrong) に間違わず、新しい言語を勉強することで異文化を知っていくことを楽しむことが外国語学習では最も重要なことであると感ずることができた。今回の実習で得た学びは私の人生において最高の得物だと感じており、この機会を下さった石井先生、吉本先生、そして島崎先生とインターカルト日本語学校の皆さんに感謝している。

澁谷 コロナ禍という大変な状況のなか対面で教育実習を行うことができ、貴重な経験となった。今回初めて日本語学校という教育現場の中に入り、授業の見学や教壇実習を経験したことで、日本語教師は教科書の通りに日本語を教えるだけではないということを改めて知ることができた。そして日本語教師は、学生と日本社会をつなぐ存在として学生と向き合い、学生の人生に関わっているという意識をもち、学び続けていることを学んだ。2 週間の教育実習で学んだことを心に留め、私自身も学び続けていきたいと強く思う。このような状況下にも関わらず教育実習を受け入れてくださった、島崎先生をはじめとするインターカルト日本語学校の皆さまに感謝申し上げたい。

大山 今回の実習で、日本語教員の大変さを知ったとともに、学生と交流する楽しさを知ることができた。私自身、学生の方々とたくさん話したいという思いがあり、「どうすれば伝わるか」ということを考えながら話していた。こういった考えは学生の方々も同じように持っていると思っていて、とても一生懸命に話してくださっていた。その姿をみて、「もっと日本語を学びたいと考えている方々の力になりたい。」という思いが強くなった。私は就職という道を選んだが、いつか日本語教員として働いていきたいと思った。今回の実習は、とても充実したものであったと思っており、コロナ禍で私たちを受け入れ、貴重な経験をさせてくださったインターカルト日本語学校の方々に感謝している。

◆ カイ日本語スクール ◆

運野あかね

齊藤愛

高橋千尋

瀧澤聖

竹川知佳

畑尻有希

## 1. 実習の概要

期間：2021年7月12日(月)～7月30日(金)の平日

時間：午前9時～13時/午後13時40分～17時40分

形式：オンライン

内容：日本語総合コースの「指定クラス」「作文クラス」「募集クラス」に参加し、主に授業見学やティーチングアシスタントを行った。実習生一人一人のスケジュールは異なっていたが、平均して週に2日～3日授業に参加した。同時に、2チームに分かれて実習最終日に開催された学内イベントの企画を進めた。

## 2. カイ日本語スクールについて

### 2-1 カイ日本語スクールの基本情報



設立：1987年2月（34年目）

場所：新宿区大久保1丁目15番地18（最寄り駅：JR新大久保駅）

定員：280名

職員：専任14名、非常勤講師スタッフ35名

コース：総合コース、ビジネス日本語コース、実用会話コース、サマーコースなど

理念：「イノベーションをキーワードに、学生の自己実現をサポートする」デジタル教材を駆使した最先端の日本語教育を行う機関

（基本情報については、カイ日本語スクールホームページから引用  
(<https://www.kaij.jp/ja/courses/general>)

カイ日本語スクールの特徴として、日本語総合コースの全学生にiPadを貸与し、オリジナル教材、学習プラットフォームを提供している。学習者はiPadを片手に授業に参加している。

また、独自のデジタル・ラーニング・システムKAI DLSを構築し、デジタル教材を使っているほか、カイのニュースやお知らせが載っているオンライン掲示板などを用いて、授業だけではなく授業以外のサポートも充実している。

### 2-2 コースとレベル分けについて

カイ日本語スクールでは、学習者のレベルやニーズに合わせて、「日本語総合コース」「実用会話コース」「ビジネス日本語」「サマーコース」の4つのコースを設置している。この節では、今回の実習で参加した「日本語総合コース」について述べる。

「日本語総合コース」は、半年から2年かけて高いレベルの日本語を身につける留学ビザ取得可能な日本語コースである。学習者の目的は、日本での就職や大学、専門学校への進学、日本語能力試験N1合格など、多岐にわたる。本コースの情報は以下の通りである。

- ・1学期：10週間（50日間）
- ・授業日：週5回（月～金）
- ・1レッスン：50分
- ・1週間のコマ数：20時間：9:00-12:50または13:40-17:30
- ・クラスサイズ：最大16名
- ・入学：年4回（1月、4月、7月、10月）
- ・留学ビザの申請：可能

入学資格：18才以上および高卒または同等程度

（カイ日本語スクールHP「日本語総合コース」より引用  
 〈<https://www.kaij.jp/ja/courses/general>〉）

また、「日本語総合コース」は、学習者のレベルに合わせて「LEVEL 1」から「LEVEL 8」に細分化される。学習者の学習期間とレベルは以下のとおりである。

学習期間とレベル							
初級 (6ヶ月)		中級 (9ヶ月)			上級 (9ヶ月)		
CEFR A1 / A2		B1			B2 / C1		
総合コース							
LEVEL 1	LEVEL 2	LEVEL 3	LEVEL 4	LEVEL 5	LEVEL 6	LEVEL 7	LEVEL 8

（カイ日本語スクールHP「日本語コース」より引用 〈<https://www.kaij.jp/ja/courses>〉）

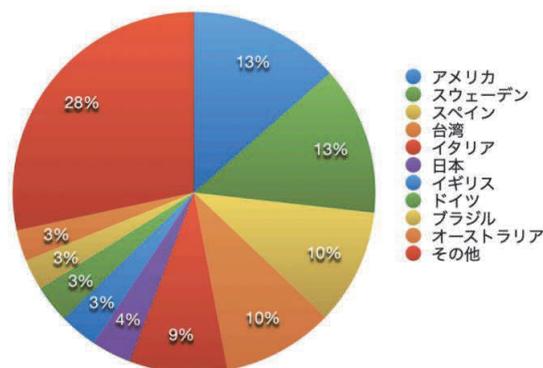
初級では、基礎文法文型をしっかり習得し、日本語の組み立てを徹底的に理解する。中級に上がると、コミュニケーション技能習得を中心に、表現のバリエーションを学び応用力を身に付ける。上級のレベルでは、論理的な日本語力や、人間関係構築のための高度なコミュニケーション技能獲得を目指して学習を行っている。

### 2-3 学習者の特徴

カイ日本語スクールは、さまざまな出身国、年齢の学習者が学んでいる。

まず、出身国について、40か国以上の学生たちが日本語学習に取り組んでいる。最も多いのは、アメリカ、スウェーデンであり、どちらも13%である。アジアで最も多いのは台湾の9%で、全体としては4番目となっている。以下のグラフからも学習者がさまざまな国から日本語を学びに来ていることが分かる。さまざまな学習者が同じクラスで日本語を学ぶことによって、日本語学習はもちろんのこと、価値観も広げることができる学習環境だと感じられた。授業では、学習者の母国における問題をとりあげ、それについてディスカッションをする活動や母国の昔話について発表する授業もあった。このような活動も世界各地出身の学習者がいることによって、より深い日本語学習に繋がると考えられる。

## 2020年度国別学生比率



(実習オリエンテーション資料より引用)

年齢についても、19歳以下から40代までの幅広い年代の学習者が在籍している。最も多いのは20代で65%、次に多いのは、30代で27%である。

授業形態についても、対面だけでなく、オンラインに対応する授業を実施している。そのため、新型コロナウイルス等の影響で来日できない学習者もクラスに参加することが可能になっている。

### 3. 授業について

#### 3-1 授業の概要

前章で述べた通り、今回の実習では「日本語総合コース」の「指定クラス」「作文クラス」「募集クラス」に参加した。実習生は授業の見学をしたり、学生同士のペアワークやグループワークに参加して質問に答えたりし、授業のアシストが主な活動内容だった。

#### 3-2 指定クラスについて

実習生が参加した指定クラスは月、水、金の午前（9:00-12:50）もしくは午後（13:40-17:30）の1、2レベル（初級）、3レベル（準中級）、5レベル（中上級）いずれかの授業で、実習開始前に送られた日程表に各自参加できる時間に名前を記入し参加した。クラスの人数は大体8人前後くらいだった。私は主に3レベルのクラスに参加した。授業冒頭のアイスブレイキングでは教師が学生ひとりひとりに「元気ですか？」などと話しかけていた。あるクラスではブレイクアウトルームに分かれて週末に何をしたかなどのテーマで雑談をしていた。その次に漢字の読み書きの時間がありフラッシュカード式に予習してきた漢字を答えたり、ペアに分かれてお互いにその漢字を読み合ったりした。5レベルのクラスでは漢字を読むだけではなく、それを使って自分で文章を考えて答える活動も行なっていて、今まで学んできた内容を踏まえてアウトプットをしていたことが印象的だった。他にも新しい漢字を学習する際に漢字そのものの持つ意味を先に教えていたところが、読みを最初に教える日本の小学校や中学校での漢字学習のやり方と違うと気づいた。文法や表現の時間ではペアに分かれてテキストのスキットを読む活動を行っていた。カイ日本語スクールでは通常授業に反転学習を取り入れており、授業内の時間で新たな導入を行わず学生たちはあらかじめ次回の授業で取り扱う文法や表現などについて、動画教材で予習

してから授業に臨むため、授業の進行がスムーズだと感じた。授業時間の最後の1時間では簡単な作文や会話などのアウトプット中心の活動を行なった。グループに分かれて与えられたテーマに沿ってディスカッションをしたり、習った表現を使ってクイズを作ったりしていた。実習生も討論に加わったり一緒にクイズを考えたり積極的に活動に加わる機会があり学生との交流を深めることができた。

### 3-3 作文クラスについて

作文クラスは火曜日の10時から12時50分の時間で行われ、実習生は5レベルのクラスに参加した。クラスの人数は12人だった。実習生はそれぞれ2人～4人程度の学生の担当を受け持ち、PagesというAppleのアプリを使って学生の作文をリアルタイムでチェックし添削したり質問に答えたりした。授業が始まると作文を書き始める前にまず今回書く作文のテーマについて数名のグループに分かれて自分の意見をまとめるための話し合いを行なった。話し合いの進行は担当の実習生が行うため、全員が等しく発言できているか、それぞれの学生がどれくらい自分の意見がまとまっているのかなどに注意して聞く必要があった。その後グループごとの部屋に分かれたまま各自で作文を書き始めるのだが、作文を書くスタイルも学生によってさまざまである程度書けるまでは自分で黙々と取り組みたいという学生もいれば分からないところがあればその都度質問をしたいという学生もいるため、その日に担当する学生のスタイルに合わせてフレキシブルに対応することが求められた。なかなか学生の希望に沿うことができずもどかしさを感じることもあったが非常にやりがいを感じることもできた。

### 3-4 募集クラスについて

募集クラスは、実習生と授業担当講師が直接連絡を取り参加するクラスである。2021年度の募集クラスは、①自国レポートについての意見交換、②文化についておしゃべり、③上級スピーキングA、④上級スピーキングB、⑤仕事を選ぶ際に重視すること等の仕事感についての計5つであった。以下では、実際に実習生が参加したクラスについて説明する。

①自国レポートについての意見交換では、学生のレポート発表(LGBT、スウェーデンの社会、スペインの失業問題)を聴き、その後意見交換をした。

③上級選択スピーキングAでは、就職面接の面接する側、される側に分かれロールプレイングを行った。実習生は面接官役として参加した。ロールプレイングの前には、企業の就職面接の際、面接官は最初にどんな挨拶をするか、またどんなことを聞かれるか等について簡単に説明を行った。

⑤仕事を選ぶ際に重視すること等の仕事感についてでは、ブレイクアウトルームで2、3人の学習者に混じり、「仕事を選ぶ際に大事なこと」「在宅勤務とオフィスワークのどちらがいいか」「日本の新卒一括採用について」など仕事に関して自由に話した。

## 4. オープンクラスについて

### 4-1 オープンクラスの概要

7月30日(金)にオープンクラスというオンラインイベントがカイ日本語スクールで実施された。これはカイ日本語スクールで学ぶ、初級から上級まで全ての学生達が参加する学内イベントである。

その中で教育実習生である私たちには、「東女の部屋」という枠を割り当てて頂き、日本語を使って楽しみながらも勉強になる企画を考えて、当日イベントを開催した。このオンラインオープンクラスの目的は「日本語を使って楽しむ！リフレッシュ！」という事で、先生方の企画には、与えられたお題のオリジナルの漢字を作って、他の人に見せお題を当ててもらい、漢字を用いたゲームや、好きなものやアニメや芸能人などに対して思う存分語り合う企画があった。他にも7つ程度、先生方による様々な興味深い企画があった。

一日かけて行うイベントであったため、東女生は午前と午後で2つのグループに分かれ、それぞれ異なるイベントを企画した。

#### 4-2 「まんがのオノマトペクイズ」について

午前の部は、竹川、齊藤、瀧澤の3名で担当した。私たちのグループは「まんがのオノマトペクイズ」を実施した。

オノマトペを使ったイベントを企画した理由としては、やはり日本語を学ぶ学生は日本の「漫画」に興味を持っている学生が多く、漫画の中でも頻繁に用いられているオノマトペの意味をこの企画を通して理解してもらうことで、より漫画の理解度を深めるきっかけになったり、日本語の面白さや奥深さを感じたりしてもらいたいと思い、このイベントを企画した。

具体的な内容としてはまず、アイスブレイクとしてお互いに自己紹介をして場を和ませてから、本題に入った。初めに、オノマトペについて詳しく説明をした。オノマトペの中でも、擬音語と擬態語の区別などについても説明を行った。音や声を表すのが擬音語で、人や物の状態を表すのが擬態語であるとクイズの初めに細かく説明したことで、後でクイズの途中でヒントを与える際にはとても役立った。そして例題を1問みんなで解いた後、本題に入った。



図 1 オノマトペの説明で使用したスライド

まず、このオノマトペの文字のみをスライドに出し、学習者に読んでもらい、そこからそのオノマトペの意味を推測してもらった。難問も用意していたので、時にはイラストを使ってヒントを出した。学生たちの回答が出そろった時点で正解を発表した。このような形式で各回20問程度クイズゲームを行った。

クイズに出題したオノマトペの種類は5つあり、バトル系のオノマトペ、ポジティブな感情を表すオノマトペ、ネガティブな感情を表すオノマトペ、生活に関するオノマトペ、自然環境に関するオノマトペである。



図 2 クイズの解説で使用したスライド

このオープンクラスを企画・運営するにあたって苦労した事は、「著作権」や「公衆送信権」により、当初予定していた実際の巷で有名な漫画を使ったイベントを企画できなくなってしまったことである。実際の漫画を用いることができなかつたため、フリー素材をインターネットから集め、少しでもイラストやオノマトペの文字のデザインこだわることを心掛けることで、漫画のオノマトペを表現した。また、初級から上級まで全レベルの学習者が参加したため、できるだけ簡単な日本語で説明したり、場合によっては英単語を用いて説明した。全レベルの学生に合わせた企画を考えることの難しさをこのオープンクラスの企画・運営を通して痛感した。

イベントを終えて、参加した学生からは高評価をいただくことができた。コメントの中には「今まで漫画に出てくるオノマトペは意味を理解するのが難しいためスルーしていたが、これからは興味を持って読みたいと思った」という声や、「日常生活で使えるようなオノマトペを学ぶことができたので使っていきたい」といった声、また「発音がこんなにかわいい日本語があることに驚いた」という感想をいただいた。

このような声から、本企画は学生たちにとって日本語の面白みを感じ、これまで以上に日本語に興味を持ってもらうきっかけ作りができたのではないかと思う。また、カイ日本語スクールの先生方からは、「オノマトペだけをメインで扱って授業を行うことはない上に、オノマトペに特化した教材も使っていないため、学生たちにとって非常によい学習の機会になったと思う」とのお言葉をいただいた。

#### 4-3 「オンライン修学旅行」について

午後の部は、運野、高橋、畑尻の3名で担当した。私たちのグループは、定番の修学旅行先である京都、沖縄、北海道の3地域へ修学旅行に行く体験をしてもらう「オンライン修学旅行」を実施した。

このテーマを選んだ理由は2つある。1つ目は、コロナ禍で旅行ができない状況を踏まえ、学生達に日本の観光地を紹介したいと思ったからだ。また、日本に来る事が出来ずに自国からオンラインで参加している学生も多かったため、日本を体験してもらう良い経験になるのではないかと考えた。2つ目は、日本の学校行事の定番である修学旅行について知ってもらいたかったからだ。修学旅行に行く学年や場所、現地での行動は、日本の文化を表す材料になると考えた。これら2つの理由を掛け合わせ、「オンライン修学旅行」を企画した。

各地域におけるオンライン修学旅行の流れとして、それぞれ修学旅行先、観光地クイズ、観光地、お土産や料理などについて紹介をした。以下のスライドは、修学旅行先の説明に用いたスライドである。



図 3 修学旅行先の説明に用いたスライド

取り上げた北海道、京都、沖縄の3地域のうち、主に京都について説明する。京都では、まず観光地クイズをした。例えば、「去年の漢字は何でしょう」という問題を出し、それに対して3択で回答を求めた。観光地では、金閣寺と清水寺の写真を示した。また、パソコンのスクリーンショット機能を用いて、修学旅行の醍醐味である集合写真を再現した。集合写真は、チャットにて学習者に送付した。また、お土産は、生八つ橋や京バウム、食べ物は、京懐石を紹介した。

北海道では、クルーズ船での観光や海鮮丼の紹介、沖縄では、首里城での観光やゴーヤチャンプルーなどを紹介した。

オンライン修学旅行の中では「ワードゲッシングゲーム」を行った。ワードゲッシングゲームというのは、1人にお題を見せてその人がジェスチャーや言葉を使ってお題を説明し、それ以外の人たちでお題の言葉を当てる、というゲームだ。お題は修学旅行の夜に盛り上がる恋バナや怪談に関連する言葉を選んだ。

1回目に「告白」というお題を出したところ、告白は動作であるため、1人で「告白」を説明するには難しいことが判明した。また、お付き合いのスタートがどの文化でも「告白」から始まるわけではなく、デートを重ねて自然と付き合うという文化も多いため、「告白」という言葉自体の選択が適切ではなかったことがわかった。それ以降、物体であり、かつどの文化の人でも知っている言葉をお題にするように心がけたところ、ワードゲッシングゲームが成立して成功するようになった。

イベントを終えて、参加した学生からは、「日本の観光地を知れて面白かった。」「集合写真を撮ったのがいい思い出になった。」などの感想をいただいた。一方的な説明にならないように、各観光地に行った事がある学生からどんな経験をしたか教えてもらう事で、より学びを深める事が出来たので、学生とのインタラクションの大切さを改めて実感した。時間が限られていたため、修学旅行について全てを伝える事は出来なかったが、疑似体験をした事で、学生たちに日本や学校文化に対する興味を持ってもらえたと思う。

#### 4-4 動画教材の作成

オープンクラス終了後、オープンクラスで使用したスライドに音声を入れた動画教材の作成を行った。この課題は、教育実習の単位には含まれず、教育実習の成果物の一つとして行なった任意の課題であり、2名の実習生が取り組んだ。新型コロナウイルスの影響もあり、近年日本語教育で盛んになっている動画作成に挑戦することで、メリットやデメリット、それに伴う注意点や課題を実感することができた。

まず、動画教材の大きなメリットとして、停止や巻き戻し、早さを変えることができるため、個人の学力やペースに合わせて学ぶことができるという点が挙げられる。そのため、動画作成の際には、その特性を念頭に置き、主に2つのことを意識する必要があると考えた。1つ目は、ゆっくり同じ表現を何度も発言するよりも、様々な言い方を試してみることであり、動画教材は、聞き逃したり、聞き取れなかったりした際、各自で聞き直すことが可能なため、同じ言い方を何度も繰り返す必要はない。それよりも、言い方を変えて、色々な表現を試してみる方が、幅広い学習者にとって理解しやすく、学びに繋がる教材を作成することに繋がる。2つ目は、対面の授業よりも更に、子音をしっかりと発音し、ひとつひとつはっきりと話すことである。母語話者であれば、聞き取れなかった語があった場合、前後の文脈から推測することができるが、日本語学習者、特に初級、中級の段階では、1単語1単語をクリアに発音しなければ、上手く伝達できない。また、動画を1.5倍速や0.75倍速など、速度を変えて視聴する点においても、子音をしっかりと発音することが重要である。加えて、話す際の息継ぎのタイミングやテンポ、抑揚などにも注意する必要がある。動画教材では、あらかじめ決めておいた手元の文章を読み上げることも可能だが、そうすると平坦な話し方になったり、変なところで息継ぎをしたりと、不自然な話し方になってしまう。動画教材でも、画面の向こうに人がいることを意識し、「伝える」「語る」意識をもって挑むことが重要だと感じた。

次に動画教材のデメリットとして、完全に一方的になってしまい、インタラクティブな活動が行えないという点が挙げられる。そのため、動画を作成する際には、問いかけを行いながら、学習者が考えながら学べるような工夫が必要である。前述した、画面の向こうに人がいることを意識し、「伝える」「語る」意識をもって挑む心構えはこの点においても重要だ。具体的には、「みなさんは、最近、ゴクゴク飲んだ飲み物がありますか?」「みなさんの国では犬は何と鳴きますか?」のように学習者が自らの生活や言語を意識しながら学習を行なえるような工夫を行った。しかし、カイ日本語スクールに通う学習者の興味や関心などを把握しきれなかったため、あまり学習する意欲を引き出すような問いを行なうことができなかったと反省している。インタラクティブな活動を行うためには、学習者を理解することが必要不可欠であると実感した。

### 5. まとめ

#### 5-1 学んだこと

##### 【齊藤】

カイ日本語スクールでの実習では座学やシミュレーションだけでは見えていなかった多くのことが分かり、新たな気づきの連続だった。その中でも特に以下の3つのことが重要な気づきとして印象に残っている。

1つ目は学生の主体性に委ねるということである。学生と教師は対等に接するべきであるということはこれまでの日本語教員養成課程の授業を通して常に意識してきたことだった。実習で実際の授業の様子を見たことでより具体的なイメージとして自分の中に定着させることができた。

2つ目は学生によるアウトプットの際に考慮の時間を充分にとるということである。実習中に学生が言葉に詰まってしまったり考え込んだりする場面に直面すると早く手助けをしないと焦ってしまっていたが、初級の学生は日本語の学習をするときに母語を媒介語として考えている場合もあるし、作文などの活動の場合母語と日本語レベルの隔たりによって本当に言いたいことが表現できずにいるということもある。そのため矢継ぎ早にこちらから話しかけてもかえって学生の負担になってしまう。学生のレベルに合わせた質問や内容整理によっていかに言いたいことを引き出せるかということの重要さと難しさを知った。

3つ目は学生の出身地のことをよく知るということである。学生の出身地について知っていることがあるとふとした時の話題になったり、お互いの距離を縮めることができたりする。そのため授業中に学生の出身地についての話で分からないことがあった時には、すぐ調べるように心がけた。また、実習中には学生から日本の様々なことについて質問を受けた。感覚で答えられるものもあればその場での返答が難しいものもあり、いかに自分が日本について知っているつもりになっていたかということを感じた。日本語教師とは学生にとって日本人の代表と言っても過言ではない。そのため日本語について、日本文化や歴史について、さらに学生のバックグラウンドについて知る必要があり常に学びが尽きないものなのだと感じた。

#### 【高橋】

実習を通して学んだ事は主に2つある。1つ目は、学生一人一人の個性を尊重する姿勢の大切である。例えば、作文を書いている時、すぐに間違いを指摘してほしい学生がいれば、対照的に全て書き終わってから指摘をしてほしい学生もいた。1つのやり方を強要するのではなく、学生の性格や学習状況を把握しそれぞれが快適に勉強できるような配慮が重要だと気づいた。それには、学生との信頼関係の構築が不可欠だと思う。2つ目は、オンライン授業ならではの工夫だ。例えば、授業やペアワークの冒頭にフリートークの時間を設けている先生の授業があった。これは、学校に来られない学生は休み時間に話す事ができないため、その分クラスメイトと交流する機会を作り、学習のモチベーションに繋がる取り組みであった。また、授業内での発話量がどうしても減ってしまうため、マイクオフで先生と一緒に発音するなど、発話量を増やす工夫がより必要だと学んだ。

#### 【瀧澤】

私が本実習を通して学んだことは2つある。1つ目は「非言語コミュニケーションの重要性」だ。学生たちはこちらが想像している以上に教師の表情を見ていた。教師の表情はクラスの雰囲気や学習者の学習に対するモチベーションにも大きく影響していると感じた。実習を通してカイ日本語スクールの6名の先生方の授業に参加したが、特にクラスの雰囲気がよく学習者が熱心に授業を受けていたクラスの先生は、非常に表情豊かで、にこやかで穏やかな先生であった。また学習者の発言中は頻繁にうなずいたり、ジェスチャーを駆使していたりした。このような様子を見て、こういった非言語コミュニケーションから学生と信頼関係を築くことができるという事を学び、改めて非言語コミュニケーションの重要性を実感した。2つ目は、各々の学生が持っている多様な価値観や知識、個性を認め尊重することの重要性である。言語能力が人の能力を判断する材料になりがちだが、長い人生経験を持っていたり、非常に優秀な学生が沢山いた。それぞれの学生が各々の育った国の文化のもと、培ってきた経験や価値観などの多様性を、まずは教師が認め尊重し、その一人一人の多様性をクラスで上手く調和させるような環境づくりやサポートを心掛けることが、日本語学校という学びの場において非常に大切であると感じた。

### 【運野】

実習を通して学んだことは大きく分けて二つある。

一つ目は、画面越しで受信/発信する難しさについてである。

作文サポーターとして参加した際は、学習者がどの画面を見ているかわからなかったため、「今どこを見えていますか？」などと確認していた。そのため、訂正箇所を説明する前の前段階で時間がかかってしまい、時間に余裕がなくなってしまうことがあり、難しく感じた。

画面越しでの受信/発信の難しさを感じたが、この点についてカイの先生からフィードバックをいただき、「どこの部分を説明しているのか」を「確かめる」のは学習の主体である学習者であり、学習者の動きに合わせて必要な動きを取るのが教師であるということを学んだ。

二つ目は、多様な回答を尊重する姿勢の大切さについてである。

授業内の練習問題には、イラストの状況に沿った言葉を入れて会話を完成させる問題があった。その問題に対する学習者の回答は本当に多様で、状況の解釈も多様でそれに伴った回答も多様に出てきた。私が正解の回答として予想していた回答とは全く違うけれど、意味や状況に沿った回答が学習者からいくつか出てきた。このことから、学習者は多様な背景を持っており、多様な解釈が生まれることを学んだ。また、多様であることが当たり前の社会を前提として、多様な考えに対してオープンな姿勢を取るものの大切さを学んだ。「多様性」は大学の様々な授業で何度も出てきた言葉であるが、この体験を通して、初めて、活きた「多様性」の意味と「多様性」を尊重することの大切さを実感することができた。

### 【竹川】

私が実習を通して、特に印象深かったことは2つある。1つ目は、「ただ日本語を学ぶだけでなく、日本の価値観も踏まえた言語学習が必要」ということだ。例えば、準中級と言われる「LEVEL 3」のクラスでは、誘いを断る際、「①アルバイトがあるので行きません」「②アルバイトがなければ、行くんですが・・・」の2つを提示し、どちらが良いか、学生に問いかけを行っていた。日本人は特に、言語学習において文法的な正しさに重きを置いてしまう傾向があり、実際、受験のための言語学習においては、その方が大事かもしれない。しかし、人とコミュニケーションをとることを目的とした言語学習では、その国の価値観や背景を踏まえた学習が必要不可欠であると実感した。

2つ目は、学習者が主体的に学べるような、インタラクティブな活動の重要性だ。例えば、文法を学習する授業では、「金曜日まで大阪に出張です」「金曜日までに作文を出してください」の2つを提示し、学習者に違いを考えさせる活動を行っていた。その課題に対して、学習者がいろいろな違いを挙げており、最終的に学習者の中から正解が導き出されていた。生徒主導の学習は、教師が一方的に行うよりも、時間もかかる活動であり、上手くいか不確定な学習である。しかし、ただ知識を詰め込まれるよりも、自分で違いを考えたものは記憶にも残りやすく、定着にも繋がることは確かである。全ての学習において取り入れることは難しいが、学習者の状況やニーズに合わせて、上手く活用することが重要だと感じた。

### 【畑尻】

実習を通してさまざまなことを学ばせていただいたが、最も印象に残っていることは2つある。

1つ目は、普段何気なく使っている言葉もその言葉の意味や言葉の違いを考えながら生活することだ。実習では、普段何気なく使っている言葉について、学習者に聞かれても答えに詰まるこ

とがあった。そのため、実習期間が始まってから、できるだけ上記のことを意識しながら生活した。何気なく過ごしていたら気付かなかったことも学習者の視点にたって考えることで、日本語について疑問を持つようになった。そのような疑問に対して、自分なりの答えを出し続けることで、実際に学習者から質問があったときにより答えやすくなると思った。母語であるからこそ見過ごされがちな意味などについて考えることが重要であると学ぶことができた。

2つ目は、いろいろな学習者と彼らの国の文化などを知ることである。それにより、日本のみ  
に焦点を当てていても気付けないことでも、学習者の出身国など海外と比較することで、見えてくるものがあるということを学ぶことができた。

## 5-2 今後に向けて

今回の実習では、事前に日本語教育に関する知識を持っていたからこそ現場で学べたこと、そして座学では得られなかった新たな気づきの両方を得ることができた。卒業後の進路は各々異なるが、これからの人生の中でも日本語教育に関わる機会を持ち続け、多文化共生社会実現のために励んでいきたいと思う。日本語教員課程での授業で学んだこと、そして教育実習を通して得た経験や知識を、これからの多様性で溢れる日本社会で活かしていきたい。

◆ 新宿日本語学校 ◆

市川あずな

伊藤優美

伊藤万佑子

新海日佳理

山崎一葉

# 新宿日本語学校 実習報告

K18E1020 市川あずな  
K18F2009 伊藤優美  
K18G1008 伊藤万佑子  
K18H2066 新海日佳理  
K18H2302 山崎一葉

## 1. 学校の概要

### 【実習概要】

- ◇ 期間：2021年6月28日～2021年8月6日
- ◇ 内容：実習内容は授業見学、オンラインカフェ、事務作業の3つであった。1名の実習生につき、1名の先生が担当としてご指導くださり、活動の詳細な内容や日程の調節についてはそれぞれに行った。担当のクラスによって、事務作業・授業準備の内容や授業形態などが異なった。

### 【新宿日本語学校の概要】

#### ◇ 基本情報

設立：1975年(昭和50年) 設立者：江副隆愛

所在地：東京都新宿区高田馬場 2-9-7 (最寄り駅・高田馬場駅から徒歩7分)

- 学習者：10代の学習者はアジア圏の出身が多い一方で、20代よりも高い年齢層の学習者は幅広い国々から来ている印象だった。
- 講師：日本語教育能力検定試験の合格、日本語教師養成講座(420時間)修了、大学または大学院での日本語教育主専攻あるいは副専攻課程修了、これらいずれかの条件を満たしている必要がある。
- 特徴：文部科学大臣が指定する準備教育課程校であり、母国において12年以上の教育を受けていない学生が大学・専門学校に進学するための準備教育を行うことができる。文法を可視化し、直観的・視覚的に理解できるように教える江副式教授法を採用している。Eラーニングに対応した独自のアプリである Visual Learning Japanese を提供している。

## 2. コースについて

新宿日本語学校では以下の6つのクラスがあり、実習生は平日クラスに参加した。  
また、平日クラスは大きく分けて2つのコースに分かれている。

#### ◇ 平日クラス

- 一般コース (日本語を使って自然なコミュニケーションを行うことを目的とする)

初級：初級基礎・初級1・初級2

(日本語の文法と基礎を学ぶ/初心者～N5合格レベル)

中級：中級基礎・中級1・中級2

(状況に基づく日本語を学ぶ/N4～N2合格レベル)

上級 (総合/進学)：上級1・上級2

(日本人との会話が支障なくできるレベルを目指す/N2～N1合格レベル)

➤ 特進コース (日本の大学、大学院、専門学校への進学を目的とする)

\*特進コースは一般コースのおよそ1.5倍のスピードでカリキュラムが組まれているため、短期間でより早く学習を進めることができる。

◇ 短期クラス (夏の4週間、日本文化を体験できるイベントも)

◇ 対策クラス (日本語能力試験、日本留学試験)

◇ 夜間クラス (忙しい方向け、毎週火曜日と木曜日)

◇ プライベートレッスンクラス (個人が1時間単位で受けることができる)

◇ 漢字クラス (生活でよく見かける漢字を中心に身に付ける)

### 3. 江副教授法・教材について

新宿日本語学校では、江副式教授法が用いられている。これは、シンプルで分かりやすい「目で分かる教授法」である。そのなかの江副式文法では、品詞ごとに色や形が決まっている重箱カードを使用している。例えば、品詞に関するカードの場合は、活用する言葉には寒色系、活用しない言葉には暖色系のように分けられている。また、日本語の構成に関しては、情報と述部に分け、その間に二列の助詞があるというように考えられており、助詞についてもそれぞれのカードを用いる。助詞のカードはそれぞれの意味を表すような十字や矢印等の形がある。これらの特徴的なカードによって文法を可視化し、正しい文章を作れるようになっている。

また、動詞の活用や敬語 (うち・よそ) を教える際には、身体を使って動きで覚えることができることも江副式教授法の特徴である。ただ見たり聞いたりして学習するだけではなく、視覚と動作で覚えることができる。

さらに、VLJ (「ビジュアル・ラーニング・ジャパニーズ」) アプリや授業内容を動画で復習できるウェブサイト等によって、授業内だけではなく授業外での日本語学習のサポートが充実している。

### 4. 各クラスの実習内容について

#### 【中級基礎クラス】

#### <主な実習内容>

中級基礎クラスの中で授業の見学、および授業補助、課題や試験等の採点を行った。最終評価として、実習期間の終盤に1コマ分、45分の授業を行った。また、中級基礎の授業が入っていない

い時間帯に、他クラスの授業補助を行った。

### <中級基礎クラスのレベル目安>

新宿日本語学校の基準では、JLPT N3 レベル。授業の様子から、読み書きは、ひらがなは基本的に全て書くことができていた。たまに、漢字について学習していないものも多く、読み書きできないものもあった。そのため基本、教科書の漢字には上にひらがながふられていた。聴解・会話は、聴解は早口だと聞き取れない言葉もあるようであったが、単純な単語や動詞、またはつきり少しゆっくりのスピードであると基本聞き取れ、内容を理解していた。

### <クラスの様子>

クラスの人気は全 8 名で、出身国がアメリカ、イギリス、ブラジル、スウェーデン、プエルトリコの学習者であった。最初の一週間は、長期休み明けのため、クラス全員オンラインでの参加となった

シェアハウスで一緒に生活している学習者がおり、授業でも近くに座っていることが多かったが、授業中で分からない日本語がある場合は、出身国や言語関係なくクラス全員で協力して調べ合い、英語やそれぞれの母国語でお互いに教え合っている場面が多々見られた。また、授業中分からないことや質問、自分の理解が正しいか確認するために例文を自主的に作って発言するなど、授業に対する態度は全体的に積極的であったと感じた。

このクラスは進学クラスと違い、学習者の学習目的が様々なため、休み時間中の学習者同士の会話では日本語を使っている様子はあまり見られなかった。先生に話しかける際、先生に質問がある際は日本語を使っていた。そのため、各学習者のモチベーションの維持と日本語の発話量を増やす方法を日々考えながら授業を行っていた。また、学習者の発話量を増やす目的で、学習者の国のことを話してもらっていたが、学習者の話によると、出身国と育った国が違う、文化に過去の歴史が複雑に絡んでいることもあり、学習者の国籍などの聞き方には気を付けて授業を行っていた。

### <授業の流れ>

初回の授業で、⑦の他己紹介を行い、最初の 1 週間は①を中心に行った。それ以降は、主に②③④を行った。⑤は週 1 で行い、⑥⑦のふるさと紹介は随時行った。

#### ①プリント教材による初級Ⅱの復習

初級Ⅱの授業で学習した動詞の活用について、穴埋め形式の問題を解いて復習するもの。授業中に考えて答え合わせをしていき、理解が薄くなっている部分や正しく理解できていない部分は再度先生が説明を行っていた。

#### ②教科書による語彙・表現・文法の学習

江副文法を活用し、語彙・表現・文法の意味説明を行った後、教科書の例文と先生が用意した

例文を学習者が音読。理解の確認として、学習者に例文を作ってもらい、できた人から発表してもらった。実際の教壇実習では、私は「～をはじめ」「とても～ない」の授業をさせていただいた。

➤ 授業内で扱われた語彙・表現・文法の例

「ごとに」「まるで／たとえば～のよう」「～（動詞）つもりはない」「～しよう（意向形）と、～（動詞）する／した」など。

③プリント教材による読解、聴解練習

読解については、5文ほどある文章を学習者が各自読み、それに関する選択式の問題に答える。その後、先生の指名で学習者が文章を音読、文章中で分かりづらい、習っていない単語や表現の意味を説明した上で、問題の答え合わせを行った。

聴解練習については、CD あるいは、先生の口頭で文章を聞き、全文または、一部を書き出す。また、試験の練習のために、絵や図、会話を聞き、選択式の問題に答える練習も行った。

④漢字の導入、テスト

授業で漢字を意味や成り立ち、書き順の説明をして導入を行う。その後、日々の宿題として漢字練習の課題を提出してもらう。その後、授業中に確認テストを行い、採点・訂正を行った。訂正は、とめ・はね・はらいなど、かなり厳格に行った。

⑤教科書による会話文の暗唱練習・テスト

教科書に記載されている、訳 5～8 文ある会話文を 5 つほどを、全員で全文音読→先生と学習者のラリー形式で音読→学習者を半分に分けてラリー形式で音読→指名された学習者 1 対 1 で音読、という順で音読練習を回数行った。その後、5 つの会話文の中から指定した会話文 2～3 つを学習者に覚えてもらい、一週間の終わりに確認テストとして何も見ずに先生と会話のラリーを行ってもらった。

⑥作文の原稿作成

「自分の将来の夢」あるいは「自分の外国語の勉強法」について、題材をどちらか選んで原稿に書き、先生が添削、その上で学習者が直し再提出するというものであった。授業では、実例を出して、文の構成、書く内容について理解してもらった。

⑦発表練習

発表練習では、「他己紹介」と「ふるさと紹介」を行った。

他己紹介は、クラスメート 2 人 1 組で互いの情報を聞き、皆の前でペアになった相手の紹介を行った。

ふるさと紹介は、学習者のふるさとについて、学習者が生まれた育った都市や有名な観光地や食べ物などをスライドにまとめたものを見せながら紹介を行った。各発表後に発表者と聞いている学習者や先生で、内容について質疑応答を日本語で行った。

## <学んだこと、気づいたこと>

まず、校長先生から日本語の歴史・起源などから教えていただき、日本語は言語遭遇の結果、文法・発音は単純に、語彙・表現、漢字は複雑になっているということを知った。前提を知るだけでも、実際に授業に臨む際にポイントとするところ、工夫するところが見えてくると感じた。日本語自体について知ることの重要性を感じた。

そして、校長先生や先生方から江副文法の品詞カードについて教えていただき、日本語の文法、品詞の正確な捉え方を学んだ。その中でも助詞の使い方の法則については、日本人は使い分けていても、学習者にとっては法則として明確でなければ分からないこともあると知り、「学習者にいかに定着するか」を本当に考えていると感じた。

また、校長先生の「学習者には日本語のシャワーを浴びてほしい」という言葉が印象に残っており、それを品詞カードや発話量、教材の中でいかに実践するかを、先生方皆さんが大切にされていると感じた。これを授業から学び、学習者が使っている姿を見て気づきを得ることは大切であると感じた。

また、日本人には当たり前でも、学習者にとっては構造や原理が理解できない部分があり、それを説明することが難しく、発想の転換が必要であると知った。例えば、尊敬語・謙譲語の捉え方を新宿日本語学校では「うち・中立・よそ」の関係性で示している。なぜなら、尊敬という意味で教えると、学習者は単純に自身が尊敬する人としらない人で言葉を分けてしまうからである。「食べる」が中立であれば、うちは「いただく」、よそは「召し上がる」という形である。更に、うち・そとを示すためジェスチャーを使っていた。教師がジェスチャーを行うと学習者も反射的に尊敬・謙譲語の単語が出てきていた。学習者の捉え方の理解、またジェスチャーによって体全体で覚えることの大切さを学んだ。

## **【中級1クラス】**

### <クラスの様子>

クラスには16名の学生が在籍しており、そのうち3名前後がオンラインで参加していた。国籍は欧米、アジア等、多様な地域出身の学生がいた。教室では、積極的に質問が行われ、教師の問いかけに複数人が反応を返す場面があるなど、学びへの意欲が高く、コミュニケーションが活発なクラスだと感じた。

### <クラスのレベル>

日本語能力試験ではN2からN3レベルである。

授業では「田中さんがご飯を食べます。どう思いますか？おいしいですね。」という表現ではあるが、日常会話よりも少し遅いペースで説明を理解していた。また、漢字や生活語彙の学習に十分な授業内時間が使われており、読む・聞くことができるインプット能力は高いと感じた。

### <クラスでの活動>

授業では主に①～④を行っており、教科書の内容が終わると④のテストを行っていた。1学期に

1回のプレゼン発表を随時行っていた。

#### ①漢字の読み書き練習・テスト

授業の最初に宿題として出されていた漢字のテストをプリントに書き込む形で行っていた。授業内では、副教材として配布されている漢字の教科書とスライドを使用し、漢字の読み方と熟語や例文を復唱していた。漢字の書き方や書き順などは授業では扱われていなかった。

#### ②文法、文型の導入・練習

授業内で最も時間をかけて行われていた学習である。教科書の文章を読んだ後、文章内で登場した文型・文法を解説した上でスライドを用いて導入を行った。導入では、学習者に文章の隠れた部分に当てはまる言葉を答えさせていた。学習者を指名する場合と、挙手をした学習者から答えてもらうパターンがあり、中級1クラスでは自主的に答える学習者が2～3人いた。導入が終わると文法・文型の解説を行い、学習者自身で作文をしてもらう練習を行った。文法の導入では、日常生活に基づいた例文が取り上げられており、積極的に答えたいような雰囲気づくりに貢献していると感じた。「ぜひ～たい」「～にとって」の導入を担当させていただいたが、例文作りにあたって思いつく場面設定が限られてしまったことで苦労したため、日本語教師は日常の様々な場면을意識的に経験する必要があるのだと実感した。

#### ③プリントと教科書による生活語彙の導入

授業見学の間に「症状の語彙」「料理の語彙」「オノマトペの語彙」の3つの生活語彙を導入していた。教科書を見ながら通して読んだ後、1つ1つの語彙を説明しており、プリントを用いて穴埋め問題などのテストが行われることもあった。

#### ④教科書の内容・音読テスト

教科書に掲載されている物語文を、学生を指名して順番に読んでいた。段落ごとに解説を行い、文章内で使われていた文法・文型の導入へとつなげていた。

#### ⑤プレゼンの原稿作成・発表

授業のはじめに、2人の学習者がプレゼンを行う時間を設けていた。テーマは自由に設定されており、「自国の飲酒文化」を取り上げる学習者や「身近に感じた漢字文化の違い」を発表する学習者があり、いきいきとした様子で取り組んでいるように感じた。「～によると」という文型を適切に使っているプレゼンがあり、実用的な日本語が身につけている学習者が多いと感じた。

### 【中級2クラス】

#### <到達目標>

「基本的な文法を習得し、日常生活で使う日本語能力を身に付ける。」

### <クラスの様子>

ヨーロッパから南米、アジアなどの異なる国籍の学生 6 人のクラスだった。コロナ禍ということもあり、対面とオンラインでのハイブリッド型授業で、3 名はオンラインでの受講だった。年齢は比較的若く、自分と近いアニメや日本の食べ物などの話題で盛り上がった。日本語を学んでいる目的は様々だったが、日本で働きたいという学習者が多かった。説明した内容をすぐに理解したいという学生が多く、疑問があると質問をしてくれた。授業中は時々笑いが起こることがあり、リラックスした楽しい雰囲気の中で授業が展開されていた。

### <実習について>

- ・実習期間 7 月 2 日～8 月 6 日（+6 月 28 日～6 月 30 日）の週 3 回
- ・実習時間 8 時 30 分～17 時 30 分（授業時間:13 時 30 分～17 時）
- ・実習内容

#### ① 新学期に向けての準備

私たちが実習を行う期間がちょうど新学期開始と重なっていたため、実習期間が始まる前の 3 日間は、新学期開始の準備を行った。実習生によって異なる内容が割り振られたが、私は備品の整理やエクセルを用いての全クラスの名簿作成と教室設営を行った。

#### ② 授業準備

絵カードの作成や漢字を説明するためのスライドを作成した。

#### ③ 授業見学、参加

授業では学習者のペアワークに参加し、新しく習った文法を使い例文を考える活動をした。また、新しい漢字の導入を行った。最終日の教壇実習に向けて、少しずつ文法の説明も担当させてもらった。

### <教壇実習について>

実習生によって教壇実習をするタイミングは様々だったが、私は最後の授業で行った。45 分間、教科書の導入と文法の導入を 1 つ行った。教科書の導入は、題材がアトムということもあり、盛り上がりながら進めることができた。1 週間ほど前から担当の先生に相談しながら、教案やスライド作りに取り組んだが、当日はとても緊張した。教壇実習をより良い授業にするためにも、普段の実習期間の間に先生の授業を観察することが大切だと思った。

### <気づいたこと、感想>

新宿日本語学校では教室に入る実習だけでなく、授業準備や備品の整理など実際に教師がしていることも体験しました。授業に関わるだけでなく、教室を運営するには様々な準備が必要だということが分かり、日本語教師は楽しさだけではないことを学びました。クラスでは話しかけてくれる学生が多く、日本のアニメや観光名所、食べ物など何か 1 つ詳しくなっていると話が弾みやすいのではないかと思います。実習は 8 時 30 分から 17 時 30 分まで週 3 回と、私はなかなか大変だと感じました。実習期間が詳しくわかったのが実習開始直前ということもあり、

アルバイトや他の大学の授業などを同時に行いながらの実習でした。実習報告書ということなので正直に言うと、かなりやる気があり、先生として授業以外のことも体験したいという方は、たくさんの方のことを学べると思います。

## 【中級2特進クラス】

### <クラスの様子>

クラスの人気は毎回12人で、登校している人が9～10人、オンラインが2～3人の計12人だった。このクラスは大学院・大学および専門学校への進学を目的としているクラスである為、年齢層は若くアジア圏を中心に編成されていた。具体的には、中国・台湾など中華系が5人、ベトナムが3人、シンガポール、フランス、サウジアラビア、ブラジルが各1人ずつであった。熱心に学習している学生が多く、授業中に積極的にメモを取り、不明点は都度先生に質問をし、真面目な学生が大半だった。一方で深夜の新聞配達後に登校している為に授業に集中できていない生徒も少なからずいた。

### <クラスのレベル>

このクラスはJLPTのN2レベルで、日常会話レベルしっかりと話すことができる上で難しい文法や表現も混ぜながら自分の言葉で様々な表現ができる学生が多かった。特に、自分の関心がある趣味（音楽や着付けなど）については詳しく伝えることができた。仕事で日本語を使うために学習している人や、19歳で5か国語を話せる人など、レベルの高い学習者が在籍する一方でN3レベルも定着していない学生も見受けられた。

### <クラスでの活動>

日付	教科書・本文	語彙・表現	文法	その他・活動	宿題	漢字
1 7/1(木) 早崎	1課の題「文化の違いを感じていますか。」P3 ニッキーブラウnP5 確認しようP6	表現1. にかけてはP9 表現2. ～かねないP9 副1. 一斉にP11		オリエンテーション 自己紹介 新しい言葉P4	P59(動詞表)	
2 7/2(金) 山口	金元1段落P5 確認しよう(話し合い)	副2. なにしるP11 副3. まるで～ないP12 理1. ものだからP11 副4. もっぱらP12	変化を表現 1. になるP18 2. にするP18 3. ようになるP18	他己紹介	P5	1課1
3 7/5(月) 山口	金元2段落P5 確認しよう2	副動1. 動詞きるP13 慣1. 気が利く 接1. それにしてはP10 べき	4. ようにするP19 5. ことになるP19 6. ことになっているP19 7. ことにするP19 8. ことにしているP19	作文告知 私の性格 三つの方法	P3	1課2
4 7/6(火) 早崎	松本智子1段落P5 確認しよう3	慣2. 気が合うP13 表現3. ても/てもまでP9 副5. あっさりP12	この他のするなる 1. 気になるP20 2. 邪魔になるP20 3. 世話になるP20 変化を表す動詞 1. それ自体で変化P20 2. 形容詞まる/めるP21 3. 漢語するP21	作文の書き方	P1 「～化する」が終われば出せる。	1課3
5 7/7(水) 山口	松本智子2段落P5 語彙を広げようP14 (性格)や態度を表す言葉 文法チェックP22	接2. ただP10 表現4. ぐらいP9 理2. だからこそP11	4. 入化するP21 5. 変化を表現+一方だP21 こと 1. 動詞+ことP23 2. 動詞+ことだP23	音読テスト告知		音記号1-10
6 7/8(木) 早崎	会話練習プリント 豆知識P27 (ことわざ1) * 会話P25.26(訪問する) CDを聞かせる	副6. どうしてもP12 その他2. べきP13	3. 動詞ことではないP23 4. 名詞のことだからP23 5. ことにはP24 6. 疑問詞+ことかP24 7. ～とのことP24	音読テスト	P2.4	

表1：第1週目の授業内容

① 漢字テスト

毎回の授業の冒頭で実施され、読み書き両方を含めたものが 10 問ほど出題された。時間は 10 分程度だった。こちらは前日に出された宿題を基に作成されており、ほとんどの生徒が満点か 1 問ミスであった。

② 1 分間スピーチ

テーマは「趣味」「コロナが収束したらやってみたいこと」などで、毎回 2～3 名の生徒が原稿をみずに自分の言葉で発表していた。個性あふれる発表で生徒によってスピーチスタイルが異なり、発表者だけでなく聴衆者にも良い学習の機会となっていた。

③ テキストの読解・文法・表現

上記の表にもあるように、毎日 10 個程度の新出の表現・文法を学習していた。一つにつき、15～20 分程度かけ、丁寧に導入していた。新出の文法や表現の導入として、とにかくたくさんの例を提示し、様々な表現を学習者自身が思考し文を作成していた。私も毎回の授業で 1, 2 個の新出の文法や表現の導入の授業を行わせていただいたが、想像以上に例文やふさわしい表現を考えるのに苦労した。

学習項目: 動詞がち	82ページ	目標: (「文型を理解、定着させること」ではなく、何が出来るようになるのか、あるいは、何を学び余うのかなど具体的に書いてください)	日常で使えるような表現の習得
流れ	教材・教具	文型・語彙	活動
導入	スライド	～がち	T「今日は～がちをやります。教科書の82ページを聞いて下さい。」 T「鈴木さんはよく学校を休みます。ここ最近だけではありません。しょっちゅう休みます。(スライド併用)」 T「鈴木さんは学校を休みがちです。」 T「がちは、そんな傾向がある、～になることが多い、よく～になるという意味です。」 SS「鈴木さんは学校を休みがちです。」
導入の			T「はい。鈴木さんはよく病気になってしまうために休みます。よく、病気になります。」 T「鈴木さんは病気がちです。」 SS「鈴木さんは病気がちです。」
導入意味			T「休みのように動詞と、病気のように名詞の時に使えます」 T「はい」 T「休む 休みがち」 T「ある ありがち」 T「忘れる?」 S「忘れがち」 T「思われる?」 S「思われがち」 T「する?」 S「しがち」 T「遅れる」 S「遅れがち」
練習の			T「はい。」 T「一人暮らしをしていると、コンビニでお弁当を買うことが多いかもしれません。皆さんはどうですか?コンビニでお弁当を買いますか?」 S「はい」 T「コンビニのお弁当ばかり食べていたら体にはよくありません。栄養バランスが良くないです。」 T「食生活が偏っています。〇〇さん、がちを使って答えてみてください」 S「食生活が偏りがちです。」 T「はい」 SS「食生活が偏りがちです。」
練習の			T「皆さんが日本語を勉強をして、間違えて使ったことはありますか?」 S「～です」 T「そうですね。ほかの人もありますか?」 S「はい」 T「～は習学生によくある間違えですね。」 T「～は習学生に?」 S「ありがちな間違えです」 T「～は習学生にありがちな間違えです」
内容理解の確認			T「では次。〇〇さん、雨の日によくだんな悪いことが起こるか想像してみましょう」 T「電車はどうですか?」 S「よく遅れます」 T「そうですね。～(遅くを覚えていっていきましょう)」 S「雨の日は電車が遅れがちです」 T「雨の日は電車が遅れがちです」 SS「雨の日は電車が遅れがちです」 T「ほかにはどんなことがありますか?」 (早く出てこなかったら) 「例えば先生は雨がやんだら、傘をお店や学校において来ることが多いです」 S「傘を忘れがちです」 T「そうですね。傘を忘れがちです。」 S「傘を忘れがちです」
スライド			T「では次。急いでいるとどんな悪いことが起こるか想像してみましょう」 (早く出てこなかったら) T「朝時間がありません。起きたら9時でした。早く家を出ないといけません。暑がって暑痲きをして急いで家を出ました。」 「あれ、寝がけがたっけな...?」 S「寝を掛け忘れてしまっ」 T「そうですね。急いでいると寝を掛け忘れてしまっ」 T「では、テストで急いで問題を解いているときはどうですか?」 S「間違えがちです。」 T「そうですね。急いでとくとミスをしがちです。」

図 1：毎回の授業で作成した教案の一例



図 2：文法のスライド



図 3：漢字のスライド

#### ④ 漢字の学習

毎日 15 文字程度、学習していた。意味や例文（使い方）を教えたうえで、フラッシュカードで発声させることによって定着させていた。こちらも毎回の授業で私が担当させていただき、スライドを基に授業をおこなった。

#### ⑤ 日本史・現代社会・英語等

このクラスの目的として、あくまでも進学を掲げている為に、入試で問われる日本語以外の学習も行ってた。日本史・現代社会など日本の高等学校と同じ教科書を使用しており、高度な学習を行っていた。クローンや遺伝子組み換えなど説明が難しいような話題であっても学習者に伝わるよう教師が説明しており、教師に求められるレベルの高さを実感した。

### 【上級 1 クラス】

#### <クラスの様子>

クラスの人気は 15 名で、コロナによるオンラインで授業を受けている学習者と対面で授業を受ける学習者は毎回ほぼ同数だった。国籍は様々であるが、同じ出身国や同じ言語を話せる学習者同士で固まって座っている印象であった。どの学習者も疑問に思ったことがあるとその時にすぐ質問しており、学習意欲の高さが伺えた。

#### <クラスのレベル>

日本語能力検定試験の N1 から N2 合格レベルを対象としたクラス。教えられた日本語そのもの

の質問より、「この言葉とどう違いますか」や「この場合はこれ（表現や語彙）は使いますか」等のもととの日本語の知識が十分にあるように感じられた。しかし、学習者間の日本語レベルに差はあるため、授業内ではできるだけシンプルな日本語を使用するようにしていた。

### <授業の流れ>

#### ①漢字テスト

毎回授業の冒頭では、漢字の読み又は書きのテストが設けられている。テストの前には学習済みの漢字を確認し、その際には読み書きのテスト間わずスクリーンに漢字のみを写し、読み方を学習者に問いかけた後に正しい読み方で修正する流れをテンポよく行う。テンポよく行うことにより、読み方を問いかけることなく自然に学習者から声を発するようになっていた。

#### ②語彙や表現の学習

一コマで約 20 語の語彙の使い方等をほぼ毎回教える。使用している教材には、空欄を含めた羅列された文章の下にある語彙のボックスから、空欄に合う語彙を選択できるようになっている。どの語彙も日本人が自然に使用する言葉であるため、教える際には教材に記載されている文章以外での例文や、写真や動画の様子と語彙を関連づけ、場面と言葉を結びつけて覚えられるようにしていた。似たような意味の語彙の場合には、意味の違いの詳細を質問されることが多かった。

#### ④ 文法または聴解、読解、聴読解

語彙の学習以外には文法もしくは聴解や読解、聴読解などの学習になる。上級クラスの学習者は基本的な文法は習得しているため、書き言葉や話し言葉を明確に区別し、硬い表現が中心であった。書き言葉と話し言葉の差異に混乱する学習者が時々見受けられた。

聴解、読解、聴読解は身近にあるニュースや新聞、小説等を取り扱っていた。日本人が普段見ているものとほぼ同様の内容を学習するため、日本語学習者にとって難しい語彙や表現が多かった。全て読んだり聞いたりするのではなく、重要な部分のみを聞き取ることで概要を把握するといった、日常生活に役立つように教えられていた印象であった。読解に関しては、既習の表現（特に書き言葉）が書かれている時が多くあるため、関連づけて教えていたこともあった。

#### ④その他

毎回ではなかったが、個人スピーチやグループワークでの意見を発表する機会があった。ほとんどの学習者は紙等を見ながらではなく、顔を上げて堂々と意見を発表することができるように見受けられた。

また、授業全体的に分からないことがあるとその場ですぐ質問する学習者が多く、質問される部分を予め用意していても、予想外の質問をされることがほとんどであった。すぐ答えるためには日本語の細かい意味や正しい使い方などの知識が必要なため、授業準備の時点で日本語の理解を深める必要があると感じた。

## 5. オンラインでの取り組み

コロナ禍のため、授業以外での学習者との交流はオンラインで行った。

### <七夕イベント>

新宿日本語学校では、例年7月7日の七夕の日に、学校で短冊に願い事を書き笹に飾るイベントを行っている。今年はコロナのため、イベント及び、短冊を書いてもらうことは全てオンラインでの実施となった。

イベントについては、七夕についての動画を作成し、学校に設置されているテレビで流してもらい、Google Classroomでも共有してもらった。動画の内容は、「夏の過ごし方」「七夕の由来」「七夕クイズ」「七夕飾りの作り方」「短冊とは」で、グループ内で分担し作成。短冊については、Jam Boardというアプリを使い、短冊をオンラインで共有し、そこに学習者や先生に願い事を書いてもらった。

### <オンラインカフェ>

オンラインカフェは、新宿日本語学校で以前から実施されている活動である。毎週計2回、午前・午後を実施。午前に授業がある学習者は午後のオンラインカフェに参加、午後に授業がある学習者は午前に参加という形で実施。zoomを使用したため、海外からの学習者も参加していた。参加者を募集するためのポスターを毎度交代で作り、Google Classroomに掲載してもらうことで呼びかけを行った。内容は、フリートークとゲームを交互に実施。フリートークでは、アニメ・漫画、音楽について、好きなものを自由に共有する形であった。ゲームでは、ジェスチャーゲーム（オリンピック競技当てクイズ）やワードウルフ、ジャストワンゲームなどを実施。スライドでイラストなどを使ってルール説明をしながらゲームを行った。

### <学んだこと、気づいたこと>

七夕について、短冊に書く「願い事」がどういうことか、日本の習慣を伝えることが難しく、言葉を選んで伝える必要があり、各国の習慣の客観的理解や日本語教育における言葉選びの繊細さ、厳格さを学んだ。また、海外から参加の生徒さんの言語レベルが様々で、言語が通じなくとも画像やイラスト、音楽は通じると分かり、そこから日本語を知るきっかけにもなるので、言語学習において興味や関心のきっかけとなる機会や経験も大切であると感じた。

## 6. 事務作業について

新宿日本語学校では午前授業、午後事務作業（あるいはその逆）のように、毎日授業に加え、事務業務も行った。新学期の授業準備や授業補佐等である。

### ① 授業の事前準備

担当教官により大幅に業務は異なったが、基本的には授業で使用するスライドの作成、補助教材の用意等である。

## ② 授業後の添削活動

生徒が提出した宿題の添削や漢字テストの採点を実施した。

## ③ 他クラスの会話補助

様々なクラスからアシストの依頼が来ており、都合がつく人が参加した。私は初級クラスの授業のサポートに2回入らせていただいた。具体的に行ったこととして、ゲームを中心とした授業1時間分の企画、大学生の日常についてのプレゼンテーション、フリートークで学生の会話相手になる等である。趣旨として、初級クラスに在籍する学生は特に日本人（の中でも特に学生）に接する機会が少ないため、学習者のモチベーション向上につながるような授業の展開を試みた。

## 7. まとめ

### \*市川あずな

日本語教師はとても大変な仕事だと実感しましたが、同時にとてもやりがいのある仕事だと思いました。実際に教壇に立たないと分からないことを学び、普段関わらない様々な国籍の人と触れ合うことができました。そのため、今まで詳しく目を向けなかった国の魅力だけではなく、日本の魅力にも気づくことができ、視野が広がる貴重な経験でした。

### \*伊藤優美

実習を通して、学習者にとって使える日本語の習得が大変重要であると感じました。授業サポートの中で、大学や社会に出る上で必要とされる知識の指導も行っていると知り、日本語教育について考えさせられました。また、教壇実習の中で、授業中での柔軟な対応力を学ぶことができ貴重な経験でした。学習者のための日本語教育をこれからも考え続けていきたいと感じました。

### \*伊藤万佑子

実習は長く大変なこともありましたが、学習者の日本語学習の一部に関われていると思うととてもうれしかったです。実習生として日本語教育の現場に受け入れ、貴重な体験をさせていただいた新宿日本語学校の皆様に感謝します。

### \*新海日佳理

SNGでは学習者の「日本語を学びたい」、先生方の「生徒のために」という双方向の熱い思いがあふれていました。言葉の力でひとびとの可能性を広げることのできる、このお仕事は本当に社会的貢献性の高いお仕事だと改めて実感し、有意義な時間となりました。

### \*山崎一葉

授業を行うだけでなく、日本語教育を通して学習者の人生を背負うという責任をもって仕事されている先生方の姿から、日本語教師として働く意義の一片を感じることができて、とても有意義な実習をさせていただきました。

◆ ラボ日本語教育研修所 ◆

石神里菜マリソル

小山留佳

東樹美和

星野早紀

山浦寛世

若松未樹

## ラボ日本語教育研修所 実習報告

星野早紀 石神里菜マリソル 小山留佳 東樹美和 山浦寛世 若松未樹

### 1. 概要

〔期間〕 2021年7月5日（月）～7月28日（水）

〔アクセス〕 公益財団法人ラボ国際交流センター ラボ日本語教育研修所

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 6-26-11 成子坂ハイツ 2F

丸の内線西新宿駅から徒歩5分、JR線新宿駅から徒歩15分

〔時間割〕 午前クラス：8時50分～13時00分／午後クラス：13時10分～17時20分

〔実習担当〕 黒崎誠先生

〔実習内容〕

①ガイダンス：6月30日（水）10時00分～

実習についての説明、日程の確認など

②参加クラス：初級後期、中級中期、中級後期、上級のうちの3クラス

期間中異なるレベルの授業を2日ずつ見学した。3つのレベル（初級、中級、上級）のクラスに参加し、合計6回見学。各週は以下のように進めた。

1日目…授業見学 2日目…授業に参加（学生として、もしくはチューターとして）

上級クラスのみオンライン授業と対面授業に、それ以外のクラスではすべて対面授業に参加。

授業見学・授業参加後に、「授業参加（観察）記録」（ラボ日本語教育研修所に提出するもの）と

「実践記録シート」（大学に提出するもの）をそれぞれ作成。「授業参加（観察）記録」は、翌週の来校時に事務局へ提出。「実践記録シート」は実習終了後、まとめてGoogleクラスルームに提出。

④自己評価：スケジュールがすべて終了した後に「振り返りミーティング」を行い、最終振り返りレポートをラボ日本語教育研修所に提出する。

⑤振り返りミーティング：7月30日（水）10時00分から2時間程度

### 2. ラボ日本語教育研修所の特色

#### ○理念

「日本語教育の実践と研究を通して、すべての日本語学習者の幸福な生活の創造に貢献する」

#### ○教師の行動、判断、および意思決定の基準

「学生にとって一番いいと思われること」

ラボ日本語教育研修所では、上記のような理念、また、意思決定の基準が掲げられており、授業をする際や授業準備をする際に、多大な時間や労力が必要であっても学習者にとって何が一番いいことなのかを考えながら行動している日本語教師が多かった。また、ラボ日本語教育研修所で働く教師たちに上記の理念や意思決定の基準が浸透しているという点もこの日本語学校の特色であると感じた。

### ○テキスト

ラボ日本語教育研修所では、市販のテキストは使われておらず各レベルごとの教材を教師が作成して授業を進めていた。そのため、この日本語学校ならではの授業や教え方で学習者に日本語を教えることができ、作成したカリキュラムに合わせた授業を行うことができる。

### ○授業に関して

現在、コロナ禍により対面授業とオンライン授業を混ぜたハイブリッド形式で授業が行われていた。また、来日できる日本語学習者が減少しているため、少人数での授業が展開され、学習者にとってより濃い時間となっていた。

## 3. 各クラスでの学び

### 【初級】

〈クラス情報〉

- ・ 学習者：1名
- ・ 国籍：バングラディシュ
- ・ 特徴：学習者のペースに合わせて丁寧に授業が進められていた。

〈授業について〉

#### 7月20日（火）対面授業

13：15～15：50 文法

沢山の絵を用いて「Nをもらう」「Nをあげる」/「Vをもらう」「Vをあげる」/「Nをくれる」「Nてくれる」の文法を導入し、パターンプラクティスによって発話の機会も多く作っていた。絵は学習者が好きなディズニーキャラクターを用いており、学習者のやる気を引き出していた。

15：50～16：30 ゲーム

授業で学習した文型を使い、授業前半でのパターンプラクティスよりも自由度の高い文を考える活動を行った。

- ・ 絵の中からプレゼントを選んで相手に渡し、その文を考える。
- ・ 絵を1つ選んで自由に物語を考える。
- ・ 学習者の国で特別な日に何をもらうか質問する。

#### 7月21日（水）対面授業

13：30～16：30 テスト実施／間違えた問題の確認・解説

語彙テスト・文法テスト・ユニットテストを行い、それぞれのテストで間違えた問題の確認・解説を行った。

16:30～16:55 漢字

漢字のグループ分け、書き順、とめはねはらい、字体の違いについての説明を行った。とめはねはらいと字体の違いの説明をする際には筆ペンとボールペンを使用して目の前で実際に書いて見せることで理解してもらっていた。

〈見学中での学び〉

- ・授業の最後に、絵の中から相手にプレゼントしたいものを選び、「もらう・あげる」の文法を使って文を作る活動をするなど、文法のインプットだけでなく、ゲーム感覚でできるアクティビティも行っており、楽しみながら日本語を使う活動ができていた。
- ・間違えた問題はただ答えを教えるのではなく、学習者が理解するまでつまずいた箇所の説明をし直すなど、分からない部分を残さない工夫がされていた。具体的には「この薬を飲めば咳が止まります」という文が分からなかった時に、まずは単語や動詞の活用の確認をして、その上で文法の確認をしていた。文法の確認では、構文をすぐに言うのではなく、「この薬を吸えば熱が下がります」というテキストの例文や「べんきょうしなければテストができません」という文など、同じ文法や関連する文法の文を使って理解してもらっていた。すぐに答えを言うのではなく、色々とヒントをだして学習者の方に考えてもらう事で、印象に残るように工夫されていた。

〈授業について〉

7月26日（月）対面授業

13:30～14:10 漢字テスト

漢字の読み・書きのテストを行った。22字がテスト範囲であった。

14:15～16:25 マシュマロタワーづくり

ルール説明を受け、学習者の方と一緒にマシュマロタワーを作る。

7月28日（水）対面授業

13:30～16:20 文法

- ・ダイアログの内容理解
- ・CDを聞いて新しい文法を確認
- ・自動詞・他動詞の練習

「～たり、～たり」、「～る前に、～た後で」、「～時に」、「～ながら」、「～たら」の練習

16:25～16:55 アクティビティー（お祝儀袋を作ってみよう）

説明書を読んでお祝儀袋を各自で作成。その後、全体で答え合わせを行う。

#### 〈見学中の学び〉

- ・文字や言葉だけで説明するのではなく、学習者の方が目で見て理解できるように工夫されていた。例えば、ダイアログの中に「説明書」という単語が出てきて、学習者が分からないとなった場合、「物の使い方を説明する本」とただ言葉で教えるのではなく、実際に本物の説明書を見せて、学習者が確実に分かるように意識されていた。また、学習者に理解してもらうための準備をあらかじめ予想して準備しておく重要さも学んだ。
- ・学習者の方が発言する時間を多くとっていた。例えば、文法を教える際、先生は絵と問題が書いてある紙を何枚も持っており、学習者はそれらの問題にひたすら繰り返し答えていた。たくさん類似した問題を何度も解くことで、授業内で学習した文法をその場で体に染みつけられるように準備されていることが分かった。

#### 【中級中期】

##### 〈クラス情報〉

- ・学習者:6名
- ・国籍:韓国、シリア、中国
- ・特徴: 1. 和気藹々とした雰囲気がある 2. 自主性を重んじる 3. 学習者の年齢や学習目的がそれぞれ異なる

##### 〈授業について〉

#### 7月6日(火)対面授業

##### 9:20~9:35【小テスト】

小テスト(N2 レベルの4択式の文法問題10題)を実施した。その後、学習者の間違いが多い箇所を、先生が重点的に解説した。このテストで5点以下をとった人には、間違えた問題を複数回紙に書いて覚えるという追加の課題が出た。

##### 9:35~10:05【聴解:ニュース】

新500円硬貨製造に関するNHKニュースを使って聴解練習をした。まず、先生が学習者に写真を見せて、学習者はニュースの内容を推測した。その後、ニュースを流し、最後は先生が同内容のニュースを簡単な単語に置き換えて、再度読み上げた。

##### 10:15~11:30【文法・作文練習】

文法練習では、「あげく、あまり、以上、一方だ、上で、上に、上は、ようではないか、えない、恐れがある、かいあって、かぎり」の計12個の文型を使いながら、各文章の単語を並び替える作業を行なった。

12題中、6題は先生が解説し、残り半分はグループに分かれて話し合い、学習者が答えを出した。その後、答えをホワイトボードに書き、全員が発表した。

## 11:40～12:40【面接練習】

この時間は、大学や専門学校の入試、採用試験の面接練習を行った。具体的には、入室から退室までの流れを全員が教室で実演し、そのあとは面接時に聞かれる予想質問への回答準備をした。面接練習では、日本特有のマナーに関する解説があった。(例：ノックは3回する、お辞儀の角度は45度にする、「失礼します」の言い方には注意するなど)

その後行なった面接で聞かれる予想問題への回答準備では、家から現在地までの道順(\*電車の場合、路線名まで詳細に記す)や出身地・国についての説明を、設問に沿って行なった。

### <見学の中での学び>

#### ○授業内の発言量と理解度は必ずしも一致しない

学習者を注意深く観察すると、発言量の多い学習者が、紙の試験で良い点数をとれる訳ではないことがわかった。反対の場合もあり、発言していなくても、よく理解している学習者がいた。背景には、個人の性格や育った環境、出身国、性別等、様々な内的・外的要因があると予測した。

#### ○トラブルへの柔軟な対応、事前準備の大切さ

NHK ニュースを流す際に、接続が上手くいかない機械トラブルがあった。先生は学習者に直接パソコンの画面を見せたり、音声を読み上げていて、予期しないことにも慌てずに対応することの難しさを痛感した。また、何時も事前準備が大切であることを学んだ。

#### ○待つこと、沈黙を恐れないこと

先生は、学習者が何を言おうとしているかに耳を傾け、その言葉を引き出そうとされていた。コミュニケーションを取る際(特に、一対大人数の場合)に、話す側は沈黙を恐れるが、聞く側にとっては、その時間が心地良く、心にゆとりをつくることを改めて学んだ。

#### ○日本語教師を楽しむこと

見学では、学習者が楽しんで学んでいる様子が印象に残った。その一因には、先生が仕事の枠を超えて、時間をかけて授業準備をされていたことが挙げられる。先生は、日常生活で行う新聞記事を読む、テレビを観るなどの行為の中でも授業で使える教材を集めているとおっしゃっていた。日本語教師には、学びの境界線はなく、アンテナを張って能動的に学ぶ姿勢が大切であることを学んだ。

## 【中級後期】

### <クラス情報>

- ・学習者：3名
- ・国籍：ベトナム・モンゴル
- ・特徴：①学習者のペースに合わせた授業  
②発話を意識した授業展開

## 7月21日(水) 対面授業

9:15～9:45 【小テスト範囲の復習(接続詞)/小テストの実施(4択・10問)】

ー小テストの前に読みトレ(音読)の実施

【読みトレ】先生のお手本 → 全体で読む → 1人ずつ読む→プリントを見ずに読む  
40分から小テストを開始、5点以上で合格。問題と解答を読み上げながら答え合わせと解説を行った。5点以下の場合は休み時間に間違えた箇所の答えの書き取りを行う。

9:45～11:00 【文法(逆接)】

ープリントを使用し、穴埋めを行いながら逆接の用法等の確認を行った。

(AであればB、AといえどもB、Aと思いきやB、AとはいえB etc. )

→それぞれの逆説を導入する際は、例文の読み上げから入っていた。

- ① 先生が例文の読み上げ
- ② プリントの穴埋めを行いながら用法、接続の確認
- ③ 例文を声に出して読ませる(全体→個人)

授業の後半では次回の小テスト範囲の確認と練習問題の配布が行われた。

その際には、全体で読みトレなどを行い学んだ範囲の復習をした。

11:15～12:45 【ディベート】

ー目標：わからないこと、聞き取れなかったことを質問する

学期末のディベート大会に向け、各週で目標を定めてディベート練習を行っていた。

授業は前半(3限)と後半(4限)で別々のテーマを扱った。

11:15～12:00 〈ディベート1〉

テーマ → 無人島に何を持っていくか ※1つのみ

- ①5分間で何を持っていくか考える(理由3つ以上考えておく)
- ②順番を決めて発表と質問を行う(発表者と質問者でペアになる)
  - ー1人目の発表者は2人目とペア
  - ー聞かれたこと以外は言わない
- ③質問者以外からの質問(聞いていないことがある場合)
  - 質問例：決めた理由、使用用途、材質、大きさなど

12:05～12:45 〈ディベート2〉

テーマ → 販売することを想定してプリントにある商品について質問する

- ①プリントに掲載されている商品から1つずつ担当の商品を決める
- ②その商品について先生に質問し出来るだけ多くの情報を得る
- ③実際に商品を宣伝してみる(他の学習者や先生は客側として聞く)
  - どのくらい情報を聞き出せたか確認する
- ④気になった点・分からない点を質問する

### 〈見学での学び〉

○分からない部分をそのままにしない授業となっていた。

学習者がつまづいた部分は理解できるまで解説等を行い丁寧に対応していた。例えば、文章中の接続詞の使い方の違いが分からなかった際には、それぞれをどういった場面で使うかイラストや例文を提示しながら分かるまで解説を行っていた授業内では細目に分からない部分がないかの確認もされていた。

○発話を意識した授業展開。

授業では、読みトレなど声に出す練習が重視されていた。発話が苦手な学習者もいる為こうした練習は重要であると分かった。また、読みトレを取り入れたことで確認テストの点数が上がった例もあると伺い、学んだ内容を定着させる上でも重要な意味を持つ活動なのだと感じた。

○「学習者にとって何が必要か」を考えた授業。

授業を行うにあたり先生方は多くの事前準備や先生方同士での学習者に関する情報等の共有(苦手な部分など)を行う事で、学習者にとって今必要なことを考えた授業を届けていた。例えば先生方の話し方という側面でも多くの工夫が見られた。授業を見学し、先生方や学習者の方と接する中で場面によって話し方を使い分けることも大切なのだと気づいた。例えば、文法の授業等では正確さが重要になる為ゆっくり話すことが必要な場面もあるが、会話の練習などでは自然なスピードでのやり取りが重要なのだと分かった。また、授業には時事ネタや日常に活かせる表現なども多く取り入れられており、様々な工夫をして学習者の方にとって得るものが多い授業を作っているのだと感じた。

### 【上級】

#### 〈クラス情報〉

- ・学習者：8名
- ・国籍：アゼルバイジャン・韓国・ベトナム・モンゴル
- ・特徴：①学校への入学・進学や就活など、日本語学習の目的がそれぞれである。
  - ②学習者が「何の為に勉強しているのか」を把握し、必要な技能に合わせて集中的に学んでいる。
  - ③学習者と年齢のスキルの幅が広い。
  - ④公的な場面で使用され日本語を扱う語彙レベルの高さ。

#### 〈授業について〉

#### 7月5日(月) 対面授業

9:15～9:45 漢熟語

一文字ずつバラバラに並べられた漢字を並び替えて、漢熟語を作るタスクを行った。語彙のレ

ベルは N1～N2 程度のものであった（例：鋭敏、君臨など）。個人作業が終わったあと答え合わせを行い、作った漢熟語の意味についてと、名詞・する動詞・な形容詞・副詞・その他のどれにあたるかについて解説を受けた。日本では「情熱」を動詞として使うことはないが、韓国では同じ意味の言葉を「情熱する」のように使うことがある。こういった品詞の間違いを防ぐことと、使える語彙を増やすことを目指すために、一つ一つの解説が丁寧に行われていた。

#### 9:55～10:40 エッセイ

1時間目の授業で作った漢熟語を空欄に入れながら、「映画館と飲食」についてのエッセイを読んだ。出典はインターネットに投稿されたブログであった。タスクを通して、漢熟語が文章の中でどのように使われているのかをしっかりと確認した。空欄になっていた漢熟語以外でも、適宜丁寧に説明を加えて文章理解を深めた。

#### 11:00～12:00 発音練習

落語「恋の山の手線」の SCRIPT を見ながら、実際に落語家の人が話している動画を鑑賞した。本文の意味を解説後、読み練習を全体→個人で行い、できた人からレコーダーで読みを録音して提出。

#### 〈見学の中での学び〉

##### ○教室外での日本語使用につながる授業内容

読解の授業で扱われていたエッセイは、「映画館の中で近くに座った人がフライドポテトを食べていて、そのおいしそうな匂いに気を取られて映画に集中できなかった」という身近な内容のものであった。もし学習者が映画館に行って同じような状況に遭遇したら、授業で読んだエッセイと実体験を結び付けることができるだろうと思った。また、先述の通りエッセイの出典はインターネットに投稿されたブログである。語彙のレベル等をみながら、授業担当の先生が探してこられたものだったようだ。ラボでは指定されたテキストがないからこそ、教師が柔軟に教材を選び、実生活につながる内容を取り上げる工夫ができるのだと思った。

##### ○「生きた日本語よりもさまざまな日本語に触れる」ことが目標とされている上級クラス

発音練習の授業で落語が扱われていたことにはじめは驚いた。「買い物するときに必要な会話」などのように、実生活で必要となる題材を取り上げるのではないかと想像していたからである。このことについて授業後先生に質問させていただいたところ、そういった「生きた日本語」はこれまで初級・中級クラスでたくさん触れてきたため、上級クラスでは「さまざまな日本語」に触れることを目標にしていると教えてくださった。「教師がいいと思うものだけ与えるのではなく、さまざまなものを提示して学習者に選んでもらうことが大切」というお話がとても印象的だった。また、今回取り上げられていた「恋の山手線」は七五調であったが、日本語のリズムを意識して発音練習するにはそういったものの方がわかりやすいそうだ。ナレーションなどのように、リズムが一定でないものの方が流暢に発音するのが難しいと聞き、新たな気づきであった。

### ○取り上げるべき授業内容の枠組みの広さ

初級・中級クラスでは文法や語彙、読解問題など、ある程度「この枠組みの中から授業を構成する」と決められている。対して上級クラスでは、漢熟語からエッセイ、落語というように、授業で取り上げるべき内容の枠組みがかなり広いことがわかった。「ただ試験対策をするだけの授業は、プロの教師として情けない」という黒崎先生のお言葉が非常に印象に残っている。どのクラスでもいえることだが、それでも特に上級クラスでは、どのような授業を提供するかは教師の腕が一層問われると思った。

### ○学習者の学ぶスタイルを尊重する

学習歴が長い上級クラスの学習者は、「日本語学習のプロ」でもある。初級・中級クラスと比べると、上級クラスでは教師が学習方法を指示したり、クラス全員で行うタスクに取り組んだりすることが少なかった。それよりも個人で進めるタスクが多く、学習者一人一人の学ぶスタイルを尊重していることがうかがえた。学校教育とは異なり、「自立した大人の学習者」として扱うことが前提となっていることを直に感じた。

## 7月20日(火) オンライン授業

### 9:15~10:00 音読トレーニング

音読する文章を読みながら意味を確認し○×クイズによって理解度をチェックした。○×クイズを答える際、学習者にはただ答えを聞くのではなく答えの根拠部分についても説明を求め本当に理解していることを確かめていた。その後、音読を全員で3回行いおおよそ正しい発音などを掴んだ後45秒以内での音読練習に移った。

### 10:05~10:15 Zoomのブレイクアウトルームにて2人組で音読練習

本来であれば、学習者同士が2人組になり交代で読みあい音読練習を行う。今回は私がペアだったため、学習者は交代ではなく、集中的に音読練習を行った。まず、どんなところが苦手であるのか、癖があるのかなどを知るためにスピード関係なく音読してもらった。すると、発音は正確であったものの「されなければならない」など特定のワードのみにつまずいていたため、1度全体を読んだ後は、苦手なワードやフレーズのみを何度も繰り返し音読練習を行った。

### 10:15~11:20 全体での最終音読&読解・要約

Zoomのブレイクアウトルームから全体のルームに戻った後は、一人ずつ時間測りながら音読をする。音読後、先生から一人一人に対しフィードバックを行い、音読トレーニングは終了した。

読解・要約の時間については、A/B/Cの3クラスに分かれそれぞれに先週のフィードバックやクラスのレベルに合わせた課題についての説明を行った。本来、授業は12:40までだが、課題説明が終了後は個々の時間となった。質問があれば残り、また一度Zoomを抜けたとしても何かあればZoomに入り直し質問をする、といったことも可能だった。課題完了次第、メールにて先生に提出し授業は終了となる。

〈見学の中での学び〉

○音読には性格が出る。

私がペアになった学習者は慎重な方だった。そのため、正確に読むことはできるものの、45秒以内に音読するスピードが足りなかった。そこで、苦手であったり時間がかかる部分のみを音で覚えるように複数回集中的に練習したところ、時間制限内に読むことができた。

○ミュートを外しての音読は、参加意識向上の効果がある。

全体で3回音読をする際、全員ミュートを外した状態で音読練習を行った。個人的には、オンラインであるために音のズレが生じ音読練習がしづらいのではないかと考えた。しかし授業を通し、オンラインだからこそ、たとえズレが生じたとしてもミュートを外して全員の声が聞こえる中で練習することで参加意識が向上すると理解した。

○同じクラスであっても、個々のレベルに合わせて行う題材を変えている。かつ、その題材選びの時間・労力は大きい。

読解・要約の授業では、クラス内においてもA/B/Cといったレベルごとに分かれそれぞれに合わせた文章内容の課題を行う。今回Aは新聞の社説、Bは『日経トレンディ』より製品紹介Cは東京外国語大学留学生日本語教育センター『中級』より貨幣の形について、を扱っていた。この題材探しの為、先生は「新聞は全社読み、雑誌・日本語教育用テキストにも目を通す」とおっしゃっており、題材探しへの時間と労力の大きさを痛感した。

○オンラインだからこそ、個々人の好きな勉強スタイルに環境を合わせることができる。

読解・要約の時間においては、フィードバックと課題説明が終了次第、個々の作業時間だった。その時間における勉強スタイルは、Zoomに残っても抜けても良いという自由なスタイルであった。人によって、他人の音に敏感であるタイプや人と一緒に勉強したいタイプと勉強スタイルは様々であると考えられる。そのような、個々の好きな勉強スタイルにも、オンラインは寄り添えると気付いた。

○先生自身も学習者となり、「外国語を学ぶ」ということを理解しながら教育法を考えている。

今回オンラインの上級クラスを担当していただいた先生は、中国語と韓国語の学習者でもあった。「自分自身も外国語を学んでいる中で、音読と暗唱の重要性に気づき授業で重点的に扱うようになった。」とおっしゃっており、自分自身も学習者になり学習者の視点に立つことを忘れない姿が衝撃的だった。

#### 4. まとめ

〈実習を通して気づいたこと〉

- ・自分の常識が世界的に見たら常識ではないということに気づかされた。具体的には、日本では義務教育における第二言語は英語であり、私は今までそれが当たり前だと信じて疑った事など

なかったが、アゼルバイジャン出身の学習者の方の場合は自国の学校での第二言語が英語ではなくロシア語であったと聞き、国の言語政策はその国の歴史や外交関係などに大きな影響を受けているということを改めて認識した。学習者のバックグラウンドは日本語学習にも影響するため、学習者の国の義務教育などを考慮した上で授業構成を考える必要もあるのだと感じた。このことから、日本語教育現場では、学習者一人ひとりのバックグラウンドを理解するために共に常に自分の常識を疑い続け、学び続ける姿勢が必要であると実感した。

- ・自分は日本語を理解せずに使っていることに気づかされた。具体的には、普段使っている自分の日本語が学習者の勉強しているものとは異なっており、学習者の方と会話をする時に自分の日本語があっているのか不安になってしまったことや、学習者の方に「髪の毛を逆立てる」「彼の意見に共鳴した」という文の意味を聞かれた時に、すぐに説明ができなかったことが挙げられる。「逆立てる」という言葉も「共鳴する」という言葉も、もとの言葉の意味から発展した意味が含まれており説明に困ってしまった。このことから日本語ネイティブであっても日本語の文法は勉強しないと身につかないということと、自分が普段なんとなく使っている言葉のニュアンスを客観的に分かりやすく説明することの難しさを実感した。そして、日本語教師には「なんとなく使えてしまう日本語」を客観的に説明する技術が求められるのだと感じた。

〈授業における工夫〉

#### 【教材選びと使い方】

ラボでは雑誌などの生教材や先生方の作ったワークシートなど、オリジナルテキスト以外にも多種多様な教材が授業で使用されている。こうした教材の準備にはとても多くの時間が費やされている。授業で何を使うのかを決める際には「どんな学習者」がいて「何を必要としているのか」を考えることが重要なのだという。その為、先生方の中でこまめに情報を共有しているという。加えて、雑誌や新聞などを授業で扱う際にはなるべく新しいものを使い情報をアップデートする様にしているという話もあった。また、イラストなどを使用する際のジェスチャーなどを多く取り入れ分かりやすく説明するといったように使い方においても工夫が見られた。他にもカードを用いてパターンプラクティスを行った際はスピード感を意識し練習する事で授業にメリハリがつけられていた。

#### 【対話を重視した授業】

ラボでは単に教師が教えるだけの一方的な授業ではなく、学習者との対話を重視した双方向の授業が意識されていると感じた。どのクラスでも学習者が感じたことや疑問に思ったことはそのままにされず、授業の中で共有されていた。また、質問を促す場面や学習者の話を聞く場面も多くあった。その為、どのクラスでも比較的発話が多く全体の雰囲気も良かった。加えて、先生方は学習者からの質問に答える際、文法的な知識からだけでなく文化や歴史を含む様々な側面から疑問に答えていた。こうした点から学習者との対話を大切にしていることが窺える。

### 【生活を見据えた授業づくり】

様々なクラスに参加する中で、ラボでは単に言語を教えるだけでなくその先を見据えた授業をしているのだと気づいた。単に机に向かって勉強をするのではなく、学習者が主体性を持って学ぶことが出来る環境をつくることで、学びが実生活に還元されるような授業が作り上げられているのだと感じた。例えば、会話のテストを行う際には実際に電話をかけることもある。また、上級クラスになるとノートやメモの取り方なども教えられている。他にもラボでは学習者の生活指導に力を入れており、遅刻や提出物の遅れには厳しく対応している。こうした行為を繰り返した場合はペナルティもあるという。これらは実際に学習者たちが社会に出たときのことを想定して行われているのだ。ラボでは、学びを教室の中で終わらせず日常生活へと繋げていくことが重視されているのだと考えられる。

〈教師像について〉

### ラボ日本語教育研修所の教師の特徴

#### 【向上心を持ち、常に学び続けている】

ある先生は、英語の通訳教室を4つ通い、現在においては日本語教師でありながら韓国語と中国語の“学習者”であるという。「自分も常に学習者であることで学習者の視点を持ち、授業内容などに活かしている」とおっしゃられていた。例えば、音読の授業についてだ。自分自身が外国語の学習者であるときに何度も音読をし暗記することで読解力が上がった経験を活かし、自分の日本語の授業内容においても音読における割合を増やしているそうだ。自分自身が常に向上心をもって行動を起こし学習者へも影響を与えていく姿が見られた。

#### 【先生自身が楽しんでいる】

日本語教師の授業にかかる時間・労力は大きい。例えば文章の読解・要約において、どのような題材の文章にするのか選定する際、先生は新聞全社・雑誌・日本語教育用テキストなどに目を通す。また、ドラマ鑑賞後のワンシーン要約の際は、ドラマの選定において、30分程度といった時間・1話完結型か・宗教的問題はないか・日本のリアルを伝えられるような内容か、といった様々な条件をもって選定しているとおっしゃられていた。このことを聞き、「大変ではないですか」と伺った。すると「はい、大変です。けれど準備が醍醐味であり“楽しい”です。」とおっしゃられた。楽しいからこそ、労働時間外であっても常にアンテナを巡らし「何か学習リソースになりえないか」と考え続けられるのだと感じた。

#### 【“学習者ファースト”という考え方を持っている】

学習者ファーストとは、判断に迷ったら“学習者のためになる”方を選ぶ、という考え方である。この学習者ファーストという考え方がラボ日本語教育研修所の先生には共通してある。それがたとえ1から資料を作り直すことになったとしても、“学習者のためになるのか”を突き詰める。実際に初級クラスにおいて、急遽コロナのワクチン接種会場でのコミュニケーションについての授業が行われた。初級レベルにおいては医学的単語も含まれるため、非常に難易度の高い授

業ではあったが、先生は「“必ずこれから学習者に必要になる”と考え授業に組み込むことにした。」とおっしゃられた。学習者に必要なことは何か、という学習者ファーストな考えが反映された授業内容変更であったと考える。

## **実習を通して学んだ日本語教師の仕事**

### **【人に寄り添う仕事】**

日本語学校に在籍する学習者は、出身国や母語、年齢、来日目的等、それぞれがもつ背景が異なる。それに加えて、個人の性格や学習速度、学習到達目標等、各学習者によって違いがある。そのため、日本語教師は、学習者に合わせた指導をしていく必要があるのではないか。指導には、第一に学習者が何を考え、話そうとしているのかを「聴く」姿勢をとることが大切だろう。それに加えて、教師が仕事に向かう姿勢、その背中を学習者に見せることを通して、良い授業態度や締め切り期限厳守をはじめとする基本的な人のあり方を示す必要があることを実習において学んだ。また、それらを通して、皆が自ら学ぶ自立した学習者になることが重要であり、時には厳しく指導していくことも日本語教師の仕事の一部であると考えた。

### **【柔軟性が問われる仕事】**

上述したように、学習者によって文化やマナー、ルールが異なる。そのため、日本語学校の教室には「常識」が存在しない。日本語教師は、当たり前や自身の経験に基づく価値観を押し付けず、尊重することが大切であるだろう。このように実習では、教室が教師学習者に教えるという一方通行の場ではなく、双方の学び合いの場であることを学んだ。

### **【日々、自身が成長する仕事】**

日本語教師の学びに限界はない。教師は、学習者が使える日本語を習得できるよう、日常生活で使用する言語を振り返り、分析を行いながら授業準備をすることが肝要である。そのためには、強い好奇心と、新たな情報を吸収しようとする心意気が必要であるだろう。

### **〈学びを今後どう活かしていくか〉**

実習を通して最も変化したことは、自分の中の日本語教育に向き合う心構えである。学習者の方がたくさん学べる、なおかつ楽しんでもらえる授業を提供するには、教師の技術力が第一だと思っていた。そして、「自分はそれがまだまだ足りていないからもっと経験を積まなければならない」と躍起になって、日本語教育の楽しさを忘れていたように思う。教室で生き生きと授業され、授業後に「教師自身が楽しむことを大切にしている」とお話してくださったラボの先生方と接して、日本語教師に求められる最も重要な本質に気づかされた。準備も技術も経験も欠かせない要素だが、それを苦にしないためにはまず自分自身が楽しむことが必要である。今後日本語教育の現場に関わる際には、黒崎先生がおっしゃっていた「準備は自分の人生を豊かにするために行う」ことを体現し、「参加者の方とコミュニケーションをとる」「この説明の仕方で合っているのだろうか」と不安になるのではなく、まずはその場を楽しむことを意識して、挑戦を続けていきたい。

◆実習を振り返って◆

個人レポート概要



フィールド実践を行うに際して、学生は個々の目標を設定し、実践期間中に振り返りのためのデータを収集した。実習終了後、各自の目標に照らしてフィールド実践がどうであったかをデータの分析をふまえて振り返り、レポートにまとめた。

レポートのタイトルと概要は以下のとおりである。

## 【オンライン実習：フィールド実践 A】

### うさぎムーン

#### ● 雨宮雅「学びの場とともに語らいの場を」

初の試みとなったオンライン日本語クラスだったが、準備期間から実習まで実りのある活動となった。活動の中で、授業では、学習者の活発な発話や意見交換の場が学習者に提供されることが特に重要であると同時に、前準備として、クラスの雰囲気づくりも念入りにすべきだと感じた。アイスブレイクやグループ活動を考える中で、オンラインで授業をすることを不利と捉えてしまっていたこともあった。対面に比べてオンライン上で活発な意見交換を行うのは難しく、どうすればできるだけ早く話しやすい雰囲気を作ることができるのか試行錯誤の連続だった。しかし、アイスブレイクの工夫や多くの会話機会の創出に力を注いだことは、学習者の方々からのクラス満足度の高さにも影響した。最後の最後まで、調整や工夫を忍耐強く考えていくことも日本語教師には重要な素養だと感じた。

#### ● 内川鼓「『学び』と『楽しさ』を両立させるには」

筆者らのチームは「音やようすを表す日本語を学ぼう！」をテーマにオンライン日本語クラスを行った。授業を作成する過程で最も苦勞したことは、何かを持ち帰ってもらえる授業でありながら、参加者が楽しいと思える授業を作ることである。本レポートでは、事後アンケートを分析し「どんな商品だろう？」というワークと「CMを見てみよう」というワークの評価差に着目した。どちらもオノマトペからどのような商品か想像するというワークだったが、二つを詳細に振り返ったところ、より理解の足掛かりとなる部分が多いワークがより高評価を得ていることが分かった。その足掛かりとなる部分に学びを用いることで楽しさとの両立が可能となるのではないかと考えられる。上記の方法以外にも、学びと楽しさを両立させる方法はあるだろう。今後も考察を深めたい。

#### ● 大久保広美「活動の楽しさと学びの両立について」

活動の楽しさと学びの両立は、クラスの中で行う活動が学習者の日本語学習を支えるような存在になるために望まれることだと考える。言語を学ぶことはそう簡単ではなく苦に感じることも多くある一方で、楽しさだけでは成長を実感できない学習者が出てしまう可能性があるからだ。実習を経て、両立のために必要と考えたことを挙げる。学習者のレベル把握、活動のグループ分

け、スムーズな進行、時間管理、そして学習者の視点に立つことの五点である。これらの事項は相互に影響し合っているものもあり、両立の重要性和難しさを実感した。また、活動の楽しさと学びの両立について私個人の動きを踏まえて振り返ると、オンラインの特性の把握、言葉遣いという反省点がある。クラスの録画と個人での振り返りを通し、チームでの振り返りでは認識していなかったことにも気づくことができ良かった。

### ● 木俣莉子「授業運営における日本語教師の立ち位置」

実習開始前に設定した、“全員が学びを深め、楽しみ、発話をするができるようサポートする”という目標は、オンラインによる実習であったこと、参加者の日本語運用能力に大きなばらつきがあったことにより、非常に達成難易度が高いものとなった。実習前はとにかく教師側が行動し、場をうまく回すことでその目標を達成しようとしていたが、グループワーク中、筆者がトラブルで不在にした際、学習者のみで話し合いが回り、むしろこれまで以上に全員が主体的に意思疎通を図っていたことをきっかけに考え方が変わった。学習者全員の主体的な授業参加を促すには、教師側が一步引いた立場にも立つことが重要である。今後も“一步引く勇気”を持ち、全体を俯瞰し必要な時に適切なサポートをすることを目指していきたい。

### ● 柳澤由加子「学習者のレベルと発話量の調整について」

授業準備で一番難しかったことは、学習者のレベル把握である。中上級学習者が、どれくらいコミュニケーションがとれて、オノマトペのことを知っているのか理解できておらず、最初の草案は初級レベルの内容になってしまっていた。授業内容を考えても学習者が求めている内容にならず、参加しても楽しむことができない。早い段階から、日本語教育経験豊富な先生方に、具体的に中上級はどれくらいのレベルで、どんな内容が合うのか相談することが重要である。実習で、特に気をつけたことは発話量の調整である。チームで東女生の立ち位置について話し合いを重ね、東女生は講義をする教師ではなく、共に学ぶファシリテーターであるということを確認した。学習者の発話量を最大限に確保し、日本語をたくさん話す機会にするため、学習者主体でオノマトペを使用したCMを作る活動を考えた。事後アンケートで、参加者全員が「楽しかった」と答えてくれた。十分な学習者の発話量を確保できたことが、高い満足度につながったと考える。

## ひまわり

### ● 池田心「私たちのインプットと学習者のアウトプット」

日本語クラスをオンラインで開催にするにあたり、対面ではなくても積極的な参加を図ることができる「アウトプット」をクラスの目標とした。学習者からの発言を引き出すコミュニケーションを心掛けたり、グループワークを入れたりすることで、学習者それぞれが主体的に話す姿勢を身に着けていた。また、日本語だけでなく、日本の文化や日常生活の中で頻繁に使うことはない語彙についての知識もクラスで取り上げた。しかし、東京女子大学生自体に、日本文化やそれ

に関する言語の知識が備えられていることが前提であり、重要である。日本の文化に関する情報が不足している自分に恥ずかしささえ感じた。日本語教師として、言語以外の情報のニーズに応えられる知識量が必要であることを学んだ。

### ● 伊豆田理奈「オンラインクラスを通して得た日本語教育に関する学び」

コロナ禍の初の試みとして、オンライン日本語クラスが実習として行われた。オンライン日本語クラスは他の実習とは異なり、企画や広報、参加者や内容すべてを自分たちで決めて最初から最後まで行うものであり、試行錯誤の連続であった。本レポートでは、そのようなオンライン日本語クラスの実習について「オンラインクラス実習から得た学び」「オンラインクラスと対面授業の比較」「学習者に関する気づき」「自分に関する気づき」「オンラインクラスを通して感じた日本語教師に必要な力」「実習前と実習後の比較」という観点から振り返りを行った。大きな学びとしては、日本語教師が学習者への話の振り方やサポートすべてを行う必要はないということとテーマを設定することが非常に重要であるということが挙げられる。一方で、学習者への話の振り方や訂正の仕方には改善の余地があり、今後も試行錯誤が必要であると考えている。今回の学びは今後を活かし、柔軟な考え方をもち、励み続けたいと考えている。

### ● 今出絢「授業満足度とは」

事前提出した計画シートにおいて、実習目標として参加してよかったと思ってもらえる授業を展開することを掲げた。具体的な方法としては積極的な発言などのアウトプットを行ってもらいことによって一緒に授業を作っていくという形式をとりたいと考えた。目標達成の評価としては実習終了後に匿名でアンケートを取り、満足度を図ったり感想を得ることによって判断をすることとした。アンケート結果は嬉しいことに100パーセントの満足を得ることができた。しかしながら学習者によって、そもそもの日本語レベル、このオンラインクラスに参加した理由、目的なども各々全く違うものをもっている。そのため一概に感想を満足、として統一するというよりはそれぞれの目的をしっかりと理解したうえで進行していくことが、学習者に寄り添うということであり本当の意味での満足度にもつながっていくのではないかと考えた。

### ● 大川紗直「オンライン日本語クラスを通しての学び」

私は今回オンライン日本語クラス「ひまわりチーム」として5日間授業を行った。参加者の方々と直接会うことができない中で、事前の話し合い・参加者募集・教案作成・クラスの実施に至るまでのすべてをオンライン上で行うことに初めは不安の方が大きかった。しかしチームの皆と協力し合い助け合いながら乗り切ることができた。さらに事前に立てた3つの個人目標を踏まえて、「オンラインクラスにおけるメリットとデメリット」「参加者（学習者）理解の重要性」「授業は教師だけでなく学習者も含めた全員で作上げるもの」という学びを得ることができた。これらは主体的なクラスづくりが求められたオンライン日本語クラスであったからこそ得ることができたものであると強く感じている。

## 【学外実習:フィールド実践 B・C】

### インターカルト日本語学校

#### ● 李炫知「言語の存在意味について」

コロナ禍の中で対面での実習という貴重なお時間を頂き、実際に見たからこそ分かることも多く、非常に学ぶことばかりの二週間だった。二年生の時から授業の中でずっと言われてきた「学習者を一人の大人として見る」ことの本当の意味を実際の学習者と先生の関係を見て理解できたのが最も印象に残る。また、一人の学習者でもある私は、言語の「多様性」及び「存在意味」について考え直す機会を得た。そのため、文化の違いからくる違い (Difference) を違い (Wrong) に間違わず、新しい言語を勉強することで異文化を知っていくことを楽しむことが外国語学習では最も重要なことであると感じることができた。今回の実習で得た学びは私の人生において最高の得物だと感じており、この機会を下さった石井先生、吉本先生、そして島崎先生とインターカルト日本語学校の皆さんに感謝している。

#### ● 大山紗和「日本語教員に必要な資質や考え方」

今回の実習で「日本語学校の先生や学習者との交流の中で日本語教員に必要な資質や考え方を学ぶ」という目標を設定した。「学習者を子ども扱いしない」という考えのもと授業を進行すること、学習者の誤用を強く否定しないこと、学習者と視線をしっかりと合わせること、教案における配慮、学習者の特徴を捉える力などが重要であることを学んだ。これらをまとめると、学習者に対する配慮が重要になると考えられる。実際に教壇実習をして日本語教員としての知識も大切であると感じたが、それ以上に学習者が日本語を学びやすい環境、学びたいと思える環境を作ることが重要であると強く感じた。今回の目標に対し、学習者との交流はできていたものの、そこから日本語教員に必要な資質や考え方は学べていなかったと思うが、授業内や授業外での先生の動きや話し方、先生方との交流からは学べていたと思うため、今回の目標はおおむね達成できていたと考える。

#### ● 澁谷こはる「日本語教師の姿勢から学ぶ『日本語教育』」

私は、実際に日本語学校の授業に入ったのは今回が初めてであり、授業見学や日本語教師の方々によるレクチャー、教壇実習等を通してさまざまな学びがあった。そこで私は日本語教育実習の期間、教師と学習者の関係性やコミュニケーションに注目して観察を行った。私の考える「日本語教師に必要な3つの姿勢」は、「学習者との積極的なコミュニケーション」、「『使える日本語』を意識した授業デザイン」、そして「日頃からアンテナを張り、学び続けること」である。こういった日本語教師の姿勢によって、学習者の心の拠り所となるような教師、そして居場所となるような日本語学校をつくりあげることにつながる。日本語教育の現場だけではなく、これらの観点を自分自身の普段の言動や実践活動に活かすことが、私に今できることである。教育実習で学ん

だことを心に留め、人と人とのコミュニケーションを大切に生活していきたい。

### ● 滝川凜「日本語教育における主役は学習者」

個人目標に基づき「日本語教師の役割」「日本語教育の課題」「また受けたいと思う授業とは何か」ということについて自らの経験や授業の観察記録を踏まえて考えた。一見バラバラのように思えるこれらのトピックに共通している重要なことは「学生（学習者）のために」という強い想いだ。自分自身の理想の日本語教師像や今後の日本語教育業界、日本語学習に対するモチベーションについて考える際に、第一に考えるのが「学生（学習者）」のことである。「日本語教育における主役は学習者」ということは当たり前ではあるものの、今後さらに拡大するであろう日本語教育業界の主役はまさしく彼らなのだとすることを約二週間の実習を通して改めて実感し、近い将来に日本語教育に携わらずとも、日本で暮らす中で誰もが心に留めるべきことだと感じた。

## カイ日本語スクール

### ● 運野あかね「学習者が主役の授業とは」

私は、オンライン授業で学習者が楽しく、主体的に学ぶことができる環境、学習期間（クラス）による日本語のスキルの差異、伝わる日本語の話し方やジェスチャーという観点から実習を振り返り、日本語教師に求められることを考えた。3つの観点で共通していることとして日本語教師に求められていることは2つあると考えた。1つは、学習者の学習スタイル・傾向を理解し、それに合わせた行動を取ることである。学習スタイルの好みや傾向は学習者それぞれで異なるからである。また、学習者の動きに合わせることは、教師主体の授業進行を防ぐことにもなる。2つ目は、自分にとっての日本語の「当たり前」から解放され、多様な考えを学習者から引き出す力である。教師が「当たり前」から解放されることで、学習者の発信することへの不安感を除くことになり、学習者が楽しく、主体的に学ぶことができると考えた。

### ● 齊藤愛「学習者の自主性に委ねる教え方について」

カイ日本語スクールは、学生の自主性を重んじるスタイルと最先端の技術を取り入れた日本語教育で、とても自由な校風で学生も教師ものびのび活動できていると感じた。実習生の私たちもプレッシャーを感じることなくリラックスして授業に参加することができ、そのおかげで広い視野で多くの学びを発見することができた。学生それぞれの学びのスタイルを尊重するため、教え方のマニュアルがあるわけではなく、その学生ごとにフレキシブルに対応しなければならないところは私にとって大きな挑戦であった。しかし、その挑戦を通して「待つこと」「共感すること」「問いの技術」というより実践的なコツを得ることができ、日本語を教えることへの明確な自信につながった。さらにこれらのことは、今後の人生のあらゆる場面で役立つものだと確信している。カイ日本語スクールの「学習者の自主性に委ねる教え方」は、学習者の自発的な学びを促し、さらに教師と学習者の垣根を超えて学びを伸ばすものであると感じた。

### ● 高橋千尋「日本語教師の役割」

40か国以上の国や地域出身の学習者が学んでいるカイ日本語スクールで実習を行った。実習の個人目標は3つ立てた。1つ目は「様々なレベルの学習者を見て、各レベルの学習者ができることを知る」である。初級、中級、上級全ての授業に参加したことで、学習内容や指導方法の違いなどを学ぶことができた。2つ目は、「授業見学を通じて、授業の流れや文法の導入方法などを学び、自身の指導に生かす」である。授業の流れをメモし、知識としてインプットすることができた。3つ目は、「学習者1人1人の状況や性格等を配慮しながら、出来る限りコミュニケーションを取る」である。ペアワークや作文サポーターの活動を通じて、学習者に合わせたコミュニケーションの重要性を実感した。実習を通して、日本語学校における教師の役割は、日本語を教えるだけではなく、学生の生活サポート、学生全員を均等に指導、配慮すること、日本文化について正しい情報を伝えることがあると気がついた。しかし、「日本語教師とはこうあるべき」と決めつけずに、環境に応じて最適な方法を取る柔軟性が求められるのではないかと思う。

### ● 瀧澤聖「理想の日本語教師像」

私は本実習を通し、理想の日本語教師になるために求められる力や姿勢を明確にすることができた。具体的な要素は5つある。①学習者の個性を認め尊重する姿勢 ②非言語コミュニケーション力 ③多様性の調和力 ④生徒の主体性に委ね“待つ”姿勢を大切にすること ⑤オンライン授業での工夫力である。以上が私が実習を通し感じた、理想の日本語教師に求められる力だ。また本実習では実際の日本語学校の実態を目の当たりにする経験をした。それはオープンクラスのイベントを企画した時の出来事である。著作権の問題で日本語学校は一条校に認められていないことを知り、日本語学校が置かれている実態を体感した。日本国内では外国人との共生社会が進んでおり、日本語学校の需要もますます増加すると考えられる。日本語学校の学校としての位置付けが今後向上し、安心して充実した教育を提供することができるようになることを心から期待している。

### ● 竹川知佳「オンラインにおける日本語教育の実際」

私は、オンラインにおける言語学習の方法、工夫に注目し、メリットやデメリット、課題について考えることを個人目標の1つとしていた。実習を通して、メリットとしては「個人のペースで効率的な学習が行える」「学びの共有ができる」など、デメリットとしては「モチベーションの継続が難しい」「習得スキルに偏りが出る」などの特徴を見出すことができた。このような発見を踏まえ、オンラインでは「主体的で、インタラクティブな活動」「日本の価値観も踏まえた言語学習」「学習者同士や、教師と学習者の関係づくり」を意識することが重要だと考えた。現在はコロナ禍により活動が制限されているため、デメリットも目立ったが、上手くICTを活用していくことで、より良い学びに繋がれると考える。

### ● 畑尻有希「日本語教師に必要なスキル」

実習を通してさまざまなことを学ばせていただいたが、最も印象に残っていることは2つある。

1 つ目は、普段何気なく使っている言葉もその言葉の意味や言葉の違いを考えながら生活することだ。2 つ目は、いろいろな学習者と彼らの国の文化などを知ることである。それにより、日本のみに焦点を当てていても気付けないことでも、学習者の出身国など海外と比較することで見えてくるものがあるということを知ることができた。上記にあげた「日本語教師に必要なスキル」のすべてに共通することは、「知ること」である。そしてそれが、学習者の理解や学習者の学習意欲向上、さらには学習者との良好な関係を維持すること、または良好な関係を築くことにも重要になると考える。新型コロナウイルスの影響で、自由に海外へ行くことのできない状況が続いているが、この実習を通じて、たとえ直接日本に来ることが難しい状況であったとしても学習者に学ぶ権利が保障されているということを知ることができた。

## **新宿日本語学校**

### ● 市川あずな「ハイブリッド授業で学習者が主体となる授業展開」

日本語を教えるうえで、学習者が主体となる授業を展開することは重要である。しかし、実際にハイブリッド授業という環境下で教えるという経験をしたことで、学習者主体の授業を実現することは困難だと実感した。これを実現するためには、学習者自身について知ること、授業内で周囲に気を配ることによって学習者とのコミュニケーションを円滑にするべきである。どうしてもオンライン参加者と対面参加者との「壁」があることは事実なので、ハイブリッド授業ではオンライン参加の学習者を念頭に置くことで学習者が主体となる授業を展開することを可能にすると考えられる。日本語教師には単に教える能力だけでなく、学習者に寄り添うことも重要であると学んだ。

### ● 伊藤優美「学習者にとって身に付く日本語教育とは」

実習の中で、学習者にとって分かりやすい授業を意識するという目標を掲げていた。もちろん学習者にとって授業が分かりやすいことは大切であるが、ただ分かりやすいだけでは言語として学習者が使えるようになるとは限らない。江副教授法含め、校長先生から沢山のお話を伺い、学習者にとって身に付く日本語教育とはどういうものかを考える機会となった。実際、授業に参加した中でも、言語は聞いて・話して・書いて使うものであり、学習者にとって言語が身に付いて、使えるものにならなくてはいけないと感じた。そのため、日本語に沢山触れる環境を作ることが重要であり、目・耳・口など身体を使って日本語に沢山触れて慣れてもらうことは言語教育を行う上で非常に重要であると学んだ。これらは先生方の授業に参加して、自分で授業を行い、学習者と関わっていくことでしか見えてこないと感じ、今後も日本語教育に関わる機会を作りたいと感じた。

### ● 伊藤万佑子「学習者に対してどのように誤りを指摘するべきか」

私が1ヶ月半という長い教育実習の中で最も難しいと思っていたことの1つが、「学習者に対してどのように誤りを指摘するべきか」ということです。学習者は国籍、年齢、日本語レベルはも

ちろん、性格も様々です。その中で、どのような学習者にどのような方法で誤りを伝えたら、やる気を削ぐことなく学習を続けられるのかについて悩みました。誤りの指摘には様々なパターンがあり、またオンラインでの授業という風に状況も変化しつつあります。1ヶ月半もの間、教育実習をさせていただきましたが、「どのように誤りを指摘すべきか」という問いに対して具体的な答えは見つかりませんでした。しかし、最後の教壇実習に向けて少しずつ授業をしていく中で、日本語教師として受け身ではなく、自分自身も成長するつもりで授業に取り組む必要があるのではないかと思いました。「誤りの指摘」についても教師として長い期間試行錯誤し続けることが重要だと思います。

### ● 新海日佳理「日本語教育現場で感じた社会的課題と日本語教師のあり方」

今回の実習では個人目標として「多種多様なバックグラウンドを持つ学習者の視点を身に着け、実践的な指導力を習得する」ことを掲げていた。1か月半に及ぶ新宿日本語学校での実習を経て、私は“多種多様なバックグラウンド”という言葉に潜む、社会的課題を痛感し、また自分の中で“日本語教師であるということ”に対する意識の変化があった。学習者にとって最適な教師である為には日本語を教えるスキルだけではなく、教師自身が学ぶ姿勢を忘れないということだと思う。学習者一人一人の背景を認識したうえで、教師が適切な声掛けや情報を共有することで、彼らのゴールが明確になり、習熟度が高まるのではないかと考えた。また、そのためにも情勢や社会的問題に対する意識を高め、適切な情報提供が必要だと感じた。

### ● 山崎一葉「日本語学校における学習者の発話を増やす取り組みについて」

実習を通して、学習者が興味関心を持つことができる授業では発話が多くなることを学んだ。ただし、担当するクラスのレベル・雰囲気・シラバスタイプに合わせて、発話量を増やす取り組みを行うべきである。クラスのレベルによっては、日本語を話すことに対する心理的ハードルの高さが異なるため、発話量が異なる場合がある。教師が授業内での発言を取り仕切っているかどうかによって、学習者の発話に対するハードルが上がってしまうため注意が必要である。コミュニケーション・アプローチ的な授業を行うことで、学習者の自発的な発話を促すことができるが、オーディオリンガルメソッドにおいても教師の問いかけにより発話量を増やすことができる。これらの学びを通して、自発的・外発的発話のどちらが学習者に必要な練習につながるのか、学習者にとって心理的ハードルを低くするためのどんな声かけが必要なのかを考え、学習者の希望やモチベーションを考慮した上で授業を作ることが大切だと考えた。

## ラボ日本語教育研修所

### ● 石神里菜マリソル「日本語教育現場における双方向の学び」

6日間の実習を通して一番印象に残ったことは日本語教師と学習者との関係性である。ラボでは単に教師が教えるだけの一方向的な授業ではなく、学習者との対話を重視した双方向の授業が意識されていた。先生方は学習者に寄り添い学習者と対等な立場から関係性を構築していた。

実習に参加し様々な学習者や教師の方と接した中で、教えると言ってもその根本はコミュニケーションであるのだと感じた。実習に参加するまでは技術の方に目がいてしまいがちであったが、「まずは相手に興味を持つところから始まる」のだと聞き、そこから学習者に何を伝えたいのか、自分が何を伝えたいのか、学習者が必要としていることは何なのかという発想に繋がっていくのだと気づいた。それが結果的に単に言語を教えるだけではない先を見据えた授業に繋がっているのだと感じた。実習を通し、日本語教師にとって大切な事や必要な姿勢を多く学ぶことが出来た。今回得た学びや気づきを今後の生活にもしっかりと繋げていきたいと思う。

### ● 小山留佳「日本社会で実際に使える日本語を教えるための工夫」

「日本社会で実際に使える日本語」を教えるために必要なことは、学習者の立場になってそれぞれの人が必要とする授業を構成すること、学習者一人一人のバックグラウンドや気質を尊重し、それぞれに一番いいと思われる指導方法を模索することである。そのためには、当たり前だと思っている日本の文化を客観的に見直して論理的に言語化し説明することや、日常生活での場面ごとに必要な日本語の技能を分析し、そのために必要な日本語スキルを解剖して授業に組み込むことが必要である。日本語や日本社会は常に変化するため、授業内容が本当に今の日本社会で実際に使える日本語なのか常に見直して現代の社会に合った授業を構成し続ける必要があり、教師自身が常に学び続ける心構えが重要である。その上で、日本語を分析することに対して教師自身が楽しみながら向き合うことも非常に大切である。

### ● 東樹美和「日本社会での日本語使用につながる教室活動とは」

2年次にはじめて自力で作成した教案は、教室外での日本語使用につながらない内容だった。そうした経験を踏まえ、実習参加にあたっては「日本社会での日本語使用につながる教室活動とは何か」を学ぶことを目標とした。ラボ日本語教育研修所の初級クラスでは、導入から最後に行う体を動かす活動まで、一貫して実際の場面での日本語使用が念頭に置かれていた。文法項目ありきのタスクではなく、タスクありきの文法項目という進行だった。中級・上級クラスでは、初級クラスと比べて「教室外での日本語使用につなげること」が主目的となることが少なくなっていたが、それでも教材を選ぶ段階など、細かい部分で日常生活での経験につながる工夫がなされていた。そういった授業を作り上げるには、まず自分がどのようにその文法を使っているか、自分の言語行動を分析することが必要である。今回学んだことを今後の自分の実践に活かしていきたい。

### ● 星野早紀「世界の縮図である日本語学校」

日本語学校の教室は、多様な背景をもつ学習者が集まる「世界の縮図」とも言える場所だった。教室には常識が存在しないという教師や学習者の共通認識があり、一人ひとりが尊重されている雰囲気があった。何故か。理由の一つに日本語教師の学習者に対する姿勢が挙げられる。実習期間を振り返ると、学習者に寄り添い、ご自身の時間を差し出そうとされていた日本語教師のお姿ばかりが思い出される。教師は授業において学習者の声を聴き、発言を待っていた。そして、彼

らが豊かな言語生活を送るために必要なことは何かを考え、日常生活でも学習者を想って学びを止めることはなかった。特に、目、耳、そして心を傾けて「聴く」教師の姿勢を目の当たりにしたことで、私は言語学習の領域を超えてコミュニケーションの原点に立ち帰り、自分が対話の際にとる態度を省みた。私が日本語教師の中に見たこのような姿勢こそ、現在の混沌とした社会において人に求められていることではないだろうか。

### ● 山浦寛世「日本語教師の役割」

今回、ラボ日本語教育研修所での実習に参加させていただき、実際の授業を見学させていただいた。その中で、日本語教師の方が、学習者の立場をどのように理解し、授業で気を付けている部分はどのような点なのかを学ぶことを目標とした。実際の授業に初めて参加して、特にラボでは生きた日本語を教えることに重きを置いており、学習者にとって一番いいことは何かを意識して授業を行っていることが分かった。日本語能力試験に合格するための単なる試験対策をするのではなく、実生活で使えて自立できるための日本語を教えるということが役割の一つであると考えた。また、日本語を手段として用いて学習者の夢を応援するということが役目であると感じた。そのために、日本語教師は日々の生活で何気なく使っている日本語を分析して、準備し、学び続ける姿勢が必要であると考えた。

### ● 若松未樹「言語の完璧性は、学習者の“ゴールは何か”によるもの」

今回の実習において、私は3つの目標を立てた。その中でも①「先生の視点を掴み、学習者への関わり方や学習リソースについて吸収する。」を達成するため、授業を通し気づいた点・疑問点を書き出し先生に必ず伝え多くの発見を得た。その中でも特に印象的だった点は「言語の完璧性は学習者の“ゴール”によるものであり、読む・聞く・書く・話すといったスキルをまんべんなくこなせることではない。」ということだ。また、不得意分野が存在していた時必要なことは、その不得意を無くすことではなく得意分野で不得意をカバーしてあげるアプローチであることを知った。この、言語の“アンバランス性の受容”における気づきは、「言語はツールであり、最も大事なことはその言語で何をしたいのか」であるということを感じた。

2021 年度 日本語教育実習報告書

2022 年 2 月 1 日発行

編集・発行 東京女子大学 日本語教員養成課程

〒167-8585 東京都杉並区善福寺 2-6-1

実習担当者 石井 恵理子・吉本 恵子

印刷 NPC 日本印刷株式会社

